

# ジロリの女

——ゴロー三船とマゴコロの手記——

坂口安吾

青空文庫



私は人の顔をジロリと見る悪い癖があるのだそう。三十三の年にさる女の人にそう言われるまで自分では気づかなかつたが、人の心をいつぺんに見抜くような薄気味わるさで、下品だという話だ。それ以来、変に意識するようになり、あゝ、又やったか、そう思う。なるほど、我ながら、変に卑しい感じがする。魂の貧困というようなものだ。男にはメツタにやらぬ。自分では媚びるような気持のときに、逆に変にフテブテしくジロリとやるようなアンバイであるらしい。然し、どんな時にジロリとやるのだから、自分にも明確には分らず、その寸前に、あゝ今、やるな、と思うと果してジロリとやるグアイで、意識すると、後味の悪いものだ。

けれども、三十三の年までは、自分のことには気がつかず、女の人が私に対して、そうするのだけが、ひどく切なく胸にこたえて仕方がなかった。すべての女が私にそうするわけではない。あるきまつた型の女の人だけがそうで、キリキリ意地っぱりの敏腕家という姐さん芸者や女将などがそうなのである。

そういうタイプの女は、私と性格的に反撥し、一目で敵意をもったり、狎れがたい壁をきずいたりするふうで、先ずどこまでも平行線、恋など思いもよらぬ他人同志で終るべき

宿命のものゝようだ。

だから、私が口説いてモノになったという女は、もっとベタ／＼とセンチな純情派や肉感的な荒々しい男性型、平凡な良妻型などという月並なところで、知的な自信や骨っぽさのある女は例のジロリで、私と交る線がない。ところが、ジロリ型の婦人に限って、美人が多い。

然し、交る線がないということは、おのずから恋愛感情に自制や限定をつくるものか、コイツ美人だな、と思つても、夢中になるような心にならない。つまり恋愛というものは、そして恋愛感情というものは、無軌道に自然奔放なものではなしに、おのずから制限のあるもので、たとえば異国の映画女優に、どんなに夢中になったところで、悶々の情、夜もねむれずというような恋愛感情は起る筈のないものなのである。

だから私は若いときから、しばしば女にベタ惚れという惚れ方をして、だらしなく悶々と思いつめたり、夢心持によるこび、よろこびのあまりに苦悶、苦痛、ねむれず、まことにとり乱してあられもない有様であつたが、それはみんな手ぢかな女、中には万人の認め美人もいたが、氣質的に近い人、成功率の高いある型に限られていた。ジロリ型の女は、始めから他人のつもりになっている自然の構えができていたのである。

然し、ジロリ型の女でも、手をつくして口説けばモノになるということが分つたのは私が大学を卒業する二十四の年、そのときから、私の人生が変つた。

そのころの東京はまだ漫才というものが一般的なものでなく、寄席にかゝることも稀れで、浅草の片隅などでごく限られた定連相手に細々と興行していただけであつた。私はその常連で、ついには楽屋へ遊びに行つて漫才師と交こうかん驩するような、学生時代をそんなことで空費したのであるが、あるとき漫才屋さん方に時ならぬ欠勤続出して、舞台がもてなくなる騒ぎ、そのとき、楽屋へ一人の女漫才嬢が遊びに來合せていた。彼女は亭主の漫才屋さんと喧嘩別れして、目下相棒がなくて、楽屋へ油を売りに來ていたので。そこで私が、

「どうだい、アヤちゃん。あなたと私の即製コンビで、お手伝いをしようじゃないか」

「あんた、できる？」

「やつてみなきやア分らないやね。然し、なんとか、なるでしょう。お客さん方も幕を睨んでいるよりはマシだろう。まさか舞台へとび上つてヒツパタキにくることもなからうさ」というわけで、着物を拝借して、高座へ上つた。なんとか呼吸も合い、私が浪花節を唸つたり、ヒツパタかれてノビてみせたり、ハデなもので、それから十日間ほど、やつた。

思うに第一回目が最上の出来で、このときは気持に特別のハリがこもっていたせい、却ってスラスラ、うまく呼吸もあり、ハデな珍演も湧出というていであつたが、芸ごとくいうものは本腰にかゝると全然ウダツがあがらぬもので、三日四日とだんだん自分のヘタさが我が目に立つばかり、自縄自縛というものだ。

ところでその何日目かのことであるが、私が大学の三年間、親の脛すねをかじりながら、安値に遊ばせて貰つたさる土地の、私のナジミの妓を抱えているのが土地の名題の姐さんで、金龍という、この姐さんがジロリの女であつた。

私のナジミの妓は照葉という平凡な、いつも金龍に叱りつけられているような女だから、私が金龍姐さんのジロリを反撥し合つて両々ソツポの向けつくらでも一向に気にもかけない。姐さんは我利々々の凄腕すじうでの冷めたくつて薄情者の男だましの天才なのよと色々内幕をあばいてきかせる。それが一々却つてその悪党ぶりに魅力をはかれるていであるが、まだそのころは、私はこれは他人だという、てんからきめこんだ構えがあるから、その魅力も、たゞきゝおく以上に身に泌しみみた情慾をかきたてるものとはならなかつた。

私は漫才のお手伝いをしたとき、これは一度、ぜひともナジミの彼女方に披露しておく必要があると思つて、招待を発した。そのとき、どういふ風の吹き廻しか、若い妓たちと

一緒に金龍姐さんが現れたのである。

あのととき私が筆をふるって自ら出演の紙札を書いた即席の芸名が、漫才、ゴロー三船、つまりただ私の本名を二つに分けたにすぎないのである。

「あなたは本名を二つにわるぐらいの人なのね」

と金龍姐さんは例のジロリと一ベツして、こう言つてソツポをむいた。なんの意味だか分りやしないが、何か気のきいたヤツツケ文句のつもりであろう。意あまつて言葉足らず、姐さんはチョツトそういう御仁でもあった。

それからの一夜、私が照葉をよぶと、同じ待合でよそのお座敷をつとめていた照葉がやってくる。

「ゴロー師匠にお座敷よ」

という。

金龍姐さんが客人に披露して、こんどこの土地にゴロー三船という大学生ほうかん幫間が現れたのよ、趣向が變つてバカらしいから呼んでやりなさい、と言つたという。

私も癪にさわつたが、よろし、その儀ならば、目に物を見せてくれよう、というわけで、幫間になりすまして、即席、見事に相つとめて見せた。

すると金龍姐さんは案外にも、宴の終りに、この人はホンモノの幫間じゃなくて、大学生であり、こんど卒業だから、あなた方、カバン持ちにやとって上げなさい。あなた方も遊びが本職の仕事のような御方ぞろいなことから、こんなカバン持ちも趣向でしようよ、と云つてくれて、その場で就職がきまった。私はモーロー会社々長の秘書にやとわれたのである。おかげで、官費で遊べるようになったが、その代り照葉は社長の悪友にとりあげられて、甚だ貧しいミズテン芸者をあてがわれることになったのである。

モーロー会社はつぶれ、社長は雲隠れ、悪友ども、四散して、この土地に現れなくなつても、私だけは大学時代からの精勤であつた。そして私は自然のうちに金龍姐さんの幕僚になつていたのである。

私は金龍にコキ使われ、嘘をつかれ、だまされ、辱しめられ、そして手切れだの間男の尻ぬぐいだのに奔走した。

私は然し平然として、腹をたてず、お世辞をつかい、惚れているが、思いがとげられないような切ない素振りをみせた。そうすることが、姐さんの気に入ることが、自然に分つたからである。

それは私の本心でもあつた。金龍姐さんの凄腕や薄情ぶりには私もホトホト敬服してい



た。男なんか屁とも思っていないのだ。そして男をだますことがたのしいのである。たのしいのだから、どうだか、そこまでは知らないけれども、生れつきがそういう天性の根性で、六代目が素敵だとかハリマ屋がどうか、そんな芸者なみの量見は全然ない。尤も、なんでも知っているし、見てもいる。それも男をだます技術の一つであるからで、三味線や唄も達人なのだが、それがダマシの技術上必要な時でなければ用いたためしはない。万事につけてその筆法で、その意味の専門技術士であった。

私は酒間に、わざと、何年間と思いやつれている人がいるんだけど、一晩ぐらい、なんとか、ならないものかなア、などゝ三日に一度ぐらいは特別の大声で言うのであった。

又、金龍が待合などで風呂へはいるとき、せめて三助でいゝや、玉の肌にもふれるぐらいはしてみてえなア、と言ってみたり、実際にガラリ戸をあけて、いかゞ、お流し致しましたようか、と言ったりする。すると例のジロリと一べつ、私は然しいサイかまわず、後へまわって流してあげる。できるだけテイネイに、やわらかく、心をこめて流してあげる。それは尊敬というものだ。この尊敬のまごゝろほど御婦人の心に通じ易いものはない。

だから、そのうちには、昼さがりチャブダイにもたれて雑誌かなにか読んでいるうちに、ふと私の方へ白い脚を投げだして、

「蒸しタオルで足をふいてちょうだい」

イサイ承知と、さてこそ私はマゴコロこめて、毛孔ひとつおろそかにせず、なめらかに、やわらかく、拭いては程よく蒸し直し、それに心根きゝげる。まさしく魂こめるのである。夏は冷めたいタオルで、膝小僧のあたりまで、ふく。私は然し劣情をころし、そういう時には、決して、狎れず、ただ忠僕の誠意のみをヒレキする。

然しそれは恋愛の技法上から体得したことではなく、処世上、おのずから編みだしたことで、なぜなら私は金龍によつて、金銭上の恩恵を蒙っており、金持ちの客に渡りをつけて、それからそれへ儲けの口を与えてくれるからであつた。だから私は金銭上の奴隷として女王に仕えつゝあるうちに、おのずから恋愛の技法を発見するに至つたのであつた。

私は一夜、お客をふつて中ツ腹でもどつてきた金龍の情けをうけて、夢の一夜を経験した。それは金龍に奉仕して四年目、私が二十八、金龍は二十七であつた。

そして、奴隷、間夫まぶという関係は、私が三十七の年まで、戦争で金龍が旦那と疎開するまで、つゞき、そして金龍は旦那と結婚して田舎へ落ちついて、もとより私のことなどは、忘れてしまった。



私がこの手記を書くのは、金龍の思い出のためではないのだ。私ももう四十を越した。私の一生は金龍によって変えられ宿命づけられたようなものであった。

私は二十六の年に平凡な結婚をして、今では三人の子供もある。私は然し、恋愛せずには生きられない。けれども、私にとって、気質的に近い女を手易く口説いてモノにするのは恋ではなく、私の情熱はそのような安直な肉体によって満たされることが、できなくなっていた。私は例のジロリ型の反撥に敵意をいだく女を、食い下り追いつめて我がものすることだけに情熱を托しうるのであった。それは金龍が私の一生に残してくれたミヤゲであった。

金龍と私との十年の歳月は多事多難であったが、又、夢のようにも、すぎ去った。私は多情多恨であり、思い屈し、千々に乱れて、その十年をすごしはしたが、なにか切実ではなかったような思いがする。

四十にして惑わず、という、孔子は不惑をどの意味で用いたのか知らないけれども、私にとつても、四十はまさしく不惑で、私は不惑の幽霊になやまされているのである。

私の不惑という奴は、人生の物質的発見というような、ちょっと巧く言い現わしができないけれども、感傷とか甘さというものゝ喪失から来たこの現実の重量感の負担であった。私自身が昔から人をジロリと見る癖があったというが、そういうジロリの意識の苦しさが、つまり今では私のノベツの時間のような、現実というものにたゞ物的に即している苦しき冷めたさで、心というものが、物でしかないようで、それが手ざわりであるような自覚についての切なさであった。

それはまさしく不惑なのである。惑うべからざる切実な現実感覚なのである。私は自分の子供でも、やつぱり、ジロリとみる。そして、それが、私の心の全部であるということが、ハッキリとわかった。むろん女房に対してもジロリであり、金龍に対しては、これは昔からジロリ対ジロリによつて終始している関係であった。すべてがジロリであった。そのほかには、何も無い。そういうことがハッキリしてきた。この発見は、せつない発見であった。発見というものではない、それが現実の全部であるという切実な知覚であった。

日本は負けた。サンタンたる負け景色であるが、私の方は、それどころじゃない。もつとサンタンたるもので、まるでもう、心には一枚のフトンはおろか、ムシロもなく、吹き

さらしだ。

私はインチキ新聞の社長であつた。インチキといつても恐カツなどやるわけじゃない。その方面では至つて平和主義者であるが、つまりたゞ、配給の紙の半分以上は闇に流すという流儀なのである。同時に私はインチキ雑誌をやつていた。このインチキはエロ方面で、雑誌の五分の四頁ぐらひは色々の名前で私が一人で書きまくる流儀であつた。

私は遊ぶ金が必要なのだ。だから必死に稼ぐ必要があるのである。要するに、私は、それだけなのだ。

私は三人の女を追いまわしていた。いずれもジロリの女であつた。

一人は四十一の未亡人で、亡夫の院長にひきつゞいて病院を経営していた。亡夫が私の従兄で、その関係で、病氣のたびにこの病院のヤツカイになり、家族はもとより、金龍も入院したことがあつた。あげくに院長と関係ができて、このときは辛い思いをしたものである。このときばかりは、特別、嫉妬に苦しんだ。病氣のたびに世話をかけるばかりでなく、金銭のことでもかなり迷惑をかけており、ヒケメを覚えて卑屈になつているときは、口惜しさがひどいのだろう。嫉妬といつても、立場は奴隷にすぎないのだから、ゴマメの歯ぎしりという奴だ。

ウツプンを金龍にもらすわけに行かないから、このとき私はひどいハマをやった。院長のところへ行つて、金龍は私のものだというようなことを、それとなく匂わしたのだ。

院長は豪酒と漁色で音にきこえた人物だが、金と地位があり、遊びは自在で、妾をたくわえるというような一人の女に長つゞきしない性質であつた。金龍は奥さん同様のジロリ型で、だいたいこういう型と結びつき易い男であるから、要するに男としても、私にとつては苦手の型であつたのである。つまり、冷酷で、残酷であつた。

この結果は、私が金龍の出入り差しとめを食うという哀れな自爆に至つたばかり、私にもはや嫉妬どころの段ではなかつた。

私は死にますと言つた。そのとき金龍はキリキリと眉をつりあげて、

「死になさい。私の目の前で、死んでみせなさい」

私は意地にも死んで見せまうと言いたかつたが、言えなかつた。私はゾツとした。ノドを突こうと、毒薬を飲もうと、私がのたうつて息絶えるまで、眉ひとつ動かしもせず、ジツと見つめているのだ。見終ると、フンとも言わず立去つて、お座敷で世間話でもしているだけだ。私は、すくんだ。

私は魂がぬけてしまった。ふらふら立上つて、二階へ登つて、若い妓の着物のブラ下つ

ているのを、一時間ほども、眺めていたのである。そのうちに、もはや一つの解決しか有り得ないと自分の心が分つたので、私は降りてきて、両手をついて、あやまった。

「心を入れ換えます。いゝえ、心を入れ換えました。今後はたゞもう、誠心誠意、犬馬の勞をつくして、君の馬前に討死します。毛頭、異心をいだきません」

君前に討死します、と言つたので、一緒にいた若い妓が腹をかゝえて笑いころげてしまった。そして、さすがの金龍もクスンと苦笑いして、私は虎口を脱することができたのである。

金龍は意地の悪い女であつた。そんな風に腹をたてると、たゞはキゲンを直してくれず、もう冬近いころだというのに風呂桶にマンマンと冷水をみたして、私にはいれ、というのであつた。そして私がふるえながら蒼ざめて水にはいるのを、ジツト見つめていて、面白くもなさそうに振向いて立去るのだ。

私は要領を心得ていた。そういう時には、できるだけバカバカしくふるまって、笑わせるに限る。だから、冷水風呂にはいれ、という。ハイ、かしこまりました、どうせハダカのついでだから、今日は縁の下の大掃除を致しましょうと云って、いきなり、下帯ひとつに箒ほっきをかついで縁の下へもぐりこみ、右に左に隈なく掃き清めてス、だらけ黒坊主、それ

より冷水風呂へはいる。重労働の結果はカラダもあたくまって冷水への抵抗もつくというもので、縁の下の大掃除には、又、そのみにマゴゴロこめて虚心の活躍、これが大切なところである。

終戦の年の暮であつたが、院長が死んだその葬式に、私は喪服の未亡人、衣子を見つめつゝ、神に誓い、又、院長の靈に誓い、必ずあなたを私の恋人の一人の席に坐らしめてみせます、と堅く心を定めた。そして、あなたの未亡人は必ず私の恋人の一人としますから、心に約束の言葉を述べつゝ、靈前に焼香し、黙祷したのであつた。

衣子はもはや四十一、十九の女子大学生があり、十四の中学生があつたが、その冴えた容色はなお人目をひき、目も切れて薄く、鼻もツンと薄く、唇も薄く、すべてが薄く、そしてそれは金龍と同じ性質のもので、そしてやっぱり私をジロリと見るのであつた。

私は然し、こういう女の生態が分らない。金龍は浮気、浮気というよりも妖婦であつたが、芸者ならざる衣子の場合はどうだろう？ 私には予測がつかない。一般の型によつても、割りきれない。そのことが、又、さらに私の冒険心と闘志をふるいたさせた。

私は先ず年来の恩義を靈前に謝する意味に於て、多額の新円をたずさえて、幾たびか足を運び、そうすることによつて、女の客間の交通手形のようなものを彼女の心に印刷させ



ることができた。

私はそのために貧乏であった。必死に稼がなければならぬのである。

そして私は、衣子を観劇などに誘っても応じてくれる見込がいついたときに、彼女の趣味を発見することに注意した。彼女が好きであるものに誘うというのは芸がない。彼女が好きな筈であるが、まだ彼女の知らないものに誘い、感謝をうけることが必要なのだ。衣子は感謝を知らない女であつても、要するに彼女の心のある点まで私の方に傾斜せしめることが必要で、そのためには、微細に注意した筋書きを組み立て、行くことが必要なのである。彼女は元来が私のようなガラハの性格に反撥軽蔑する別人種であるのだから。

ところが私は念には念をいれたあげくに、哀れピンゼンたる手法を用いてしまったのである。由来、恋のかなわぬ恋人というものは、とかく恋仇に恋の手引きをするような奇妙なめぐり合せになるものだが、そのあさましさを知りながら、私もそのハメに自分を陥し入れてしまったのである。

衣子には恋人があつた。亡夫の院長は盲腸だの癌だの内臓外科の手術に名声ある人であったが、その歿後は、亡夫の級友で、大学教授の大浦市郎という博士が週に二回出張して金看板になっている。この人が衣子の恋人であつた。

大浦博士は色好みの人であるから、衣子という一人の女に特別打ちこむようなところはなかつたのだが、その財産には目をつけた。そういう人だから、私が砂糖だバターだ醤油だ米だとチヨイ／＼差上げるのを狎れてきて、まるで当り前のように、今度は何をとサイソクする。私をさんしたやつこ三下奴のように心得ている。先方がこうでるようになればシメタもので、私の方はサギにかけよう、今に大きくモトテを取り返してやろう、そんな金モウケはミジンも考えていないのだから、相手が私をなめてくれると、友達になったシルシのように考えるだけの話なのである。

なめられる、ということとは、つまり相手が私に近づいてくれたことなのである。さしずめ、私は、もう背中を流してやることができるわけで、女の場合なら、その肌近づいたというシルシなのだ。

だから、私は、わざと、こうやって犬馬の労をつくすからは、私だけ、ということはないでしょう、私にも、なにかモウケさせて下さいな、と云って、大浦博士の文章をいたゞいて、新聞や雑誌にのせる。精神病だの婦人科だの法医学など、違って、内臓外科、こんなものゝ文章は当節は一向に読み物にはならず、大博士の文章でも、もらって有難メイワクであるが、そんなソブりはいさゝかも見せず、たゞもう嬉しがり、恩に感じて見せるの

である。

その返礼は何か、というと、つまり、アイツは氣立のよい奴だ、腹に一物あるようなところもあり、そゝつかしい愚か者だが、案外心のよい奴だ、そう言ってくれ。そのうちには、案外あれで頭もよい、となり、アイツは却々なかなかシツカリした奴だ、手腕もある、だんだん、そういう風になる。私のモウケは要するに、それだけでよかった。こうして、衣子の周囲に、おのずから私の方へ向いてくる傾斜をつくるのが大切なのである。

ある日のこと、大浦博士の自宅へよばれたので、出向いてみると、私に一肌ぬいで貰いたいことがあるという。

大浦氏は、富田病院の財産に目をつけたが、女房子供もある身のこと、衣子と結婚するとうわけにも行かぬ。衣子が又、したゝかなとところがあつて、金銭上のことになると、色恋とハツキリ区切つて、金庫の上にアグラをかいているような手堅いところがあつた。

大浦博士の末弟は大浦種則という私大出の婦人科の医学士で二十八、まだ大学の研究室にいる、これを衣子の長女の美代子という十九になる女子大生とめあわせることを考えた。種則を富田病院の入いりむこ聾にする。衣子の長男はまだ十四で、独立するまでには時間があるから、富田家の財産を折半して、病院の方は美代子にやらせる。長男は何職業を選ぶもの

本人次第、気まゝに勉強させて、成人後、財産を分けて独立させる、という大浦博士の思惑なのである。

この話は、衣子がなかなか乗ってくれない。そこで私に一肌ぬいで、うまくまとめくれないかという相談なのだ。

「衣子夫人の信望を一身に担っている博士に説得できないことが、私なんかに来ませんや。私なんか親類縁者というわけで出入りはしているものゝ、親身にたよられているわけじゃアなし、第一、それだけすゝんでいる話を、今まで相談もうけたことがないのだから」

「そこが君、私が信望を担っているといったところで、私が当事者だから、私には説得力の最後の鍵が欠けているのさ。あれで、君、君の世間智というものは、衣子さんに案外強く信頼されているんだぜ。女というものは妙なところに不正直で、これは自信がないせいだと思ふんだがネ、ひどく親しく接触しているくせに、その人を疑ったり蔑んでいたり、疎々しくふるまう相手を、内々高く買っていたり、君の場合などがそうで、案外高く信頼されているのだよ」

と大浦博士は言った。

博士は人に接触する職業の人であるから、人間通で、人の接触つながりに就ての呼吸を

心得ている。それで私の場合も、衣子と私とのツナガりにわだかまる急所のところを、こうズバリと言つてのけて、つまりは私の説得に成功した。衣子が内々私を高く評価しているか、どうか、むしろ博士はそうでないことを知っているから、アベコベのことを言った。私は博士の肚をそう読んだが、往々にして、こういう策のある言葉が実は的を射ていることがあるもので、人間通など、云つてもタカの知れたもの、人間の心理の動きは公式の及ばぬ世界、つまり個性とその独自の環境によるせいだ。

博士のオダテは見えていたが、それが案外的を射てもいるように思うことができたから、私は内々よろこんだ。要するに、私はウマウマとオダテにのつたわけで、私はつまり、こういう甘い人間である。こせつからくカングツたあげく、要するに、向うの手に乗っているわけなのだ。

けれども私はよろこんで、じゃア、まア、ひとつ、ともかく私から話してみましような  
ど、つりこまれたフリをした。

そこで私は衣子に、

「まア、なんだなア、私はどうも、大浦先生のお頼みを受けてこの縁談のことを頼まれたわけだけど、大浦先生には大恩をうけているからイヤとは云えず、然し、どうも、縁談な

ど、いう礼儀正しい公式の世界は私の苦手ですよ。私はレッキとした天下のヤミ屋だからね。だから、あなた、浮気のとりもちだとか、オメカケの世話だとか、そういうクチなら柄になつてゐるけれども、縁談ときちやア、とりつく島がないですよ」

と、まず頭をかく。これがカンジンなところで、夫婦ゲンカは犬も食わぬ、と云われる通り、カラダを許し合つた二人というものは鋭く対立していても、ともかく他人じゃないのだから、こつちのことは、みんな一方の口から一方へ筒抜けになるものと心得ておかねばならぬ。

大浦博士からこう頼まれたけれども、実は私はこの縁談に反対だと云つてしまうと、一時は衣子を喜ばせるかも知れないが、これがいつどう変わるか、相手の二人は他人じゃないということとは、これが私の片時も忘るべからざるオトシアナというものだ。

「縁談など、いうものはマトモすぎるからヤ、コシクテ、これがあなた、当世のヤミ商談なら、公定千円の紙、ヤミに流して二千五百円、これを百レン買って二十五万円、これを一万何千部かの本にして一冊七十円、七カケで売つてザツと七十万、諸が、りをひいて、二十万はもうかる。じゃア買いましょう、ハイお手打ちということになる。話はハツキリしていまさア。縁談という奴は、ソレ家柄だ、合性だ、そんなモヤモヤしたものは、ヤ

ミ屋じゃ扱えないね。これがオメカケとくるてえと、合い性も家柄もありませんや、年齢も男前もないのだから、月々いくら、これはハツキリ、つまりヤミ屋の扱いものになるんだけど」

と益々シャツポをぬいでおく。実はこの縁談のカケヒキの方が、ヤミ屋の扱いよりも、もっと複雑な金銭勘定、例のお家騒動という含みの深い係争の根を蔵しているのである。こういう古来の家庭的な損得関係という奴は、ヤミ屋の取引には見かけないモヤモヤネチネチしたもので、たしかに私の気質に向かないことは事実である。

ところが甚だ奇妙なことが起つてしまった。



そのころ私の社に入社してきた婦人記者があつた。陸軍大将の娘で、陸軍大尉と結婚して子供も一人ある二十六の夏川ヤス子という才媛だ。

夫は幼年学校、陸士育ちの生粋の軍人であるから、敗戦にヤブレカブレ、グウタラ、不キゲン、毎日腹を立てゝいる。ヤス子は女子大英文科出身の美貌と才気をうたわれた名題

の女で、この人の就職は金銭上のことよりも、家庭の逃避、新生活の発見、人生探求というような意味の方が勝っている。

掘り出し物だと思つたから、即日なにかポケットマネーをつゝんで、入社のお祝いまでに、と差上げると、このときヤス子は例のジロリ、一べつをくれたのである。

これは社に定まったお手当でしょうか、と私をハッキリ見つめて言うから、いゝえ、私が差上げるお祝の寸志ですと申上げると、それでしたら辞退させていたゞきたいと存じますが、たつていたゞかねばならないものでございますか、と益々ハッキリと見つめて言う。その目が、妙に深く、うるんで、その奥には、私には距てられた何かゞあり、さえぎられているような気がする。私は笑つて、

「いゝえ、そんな大問題のものじゃありませんよ。もとより、それはです。何かの底意がなければ、なにがしの金円を人に差上げるものではありません。然しです。あなたが下さいとも仰おっしゃ有らないのに人が勝手にくれるものは、あなたがそれを受取つても、あなたは何を支払う必要もない。私はつまり、あなたのような立派なお方に長く社にいて欲しいという考えで、この寸志を差上げるわけですが、これを受取ることによつて、あなたに義務の生じることはありません。人が勝手にくれる物は、気軽に受取る方がよろしい



です。映画を見たり、本を買ったり、靴の一足ぐらいいは買えるでしょう。いくらかなりとあなたの人生のお役にたてば、差上げる私の方の満足というものですよ。あなたが妙にカングルと、そのために人生がキュークツになる。万事気軽に受けいれると、万事が気軽に終始する、人生はそんなものです」

ヤス子は分りましたと受取ってくれたが、そこで私が一夕晩メシに招待して、例の紙の横流しなどザツクバラんに社のヤミ性をうちあけて、

「かく申さばお分りの通り、私はしがないヤミ屋の一人、たゞ金銭を追いまわしている奴隷ですが、金銭万能というわけではありませんよ。金銭によって真実幸福をもとめうるかどうか、これは問題のあるところですが、金銭をこゝろみずにハナから金銭を軽蔑したり金銭に絶望したりすることは私はとりません。まず金銭をこゝろみて、それによって真の幸福の買えないことに絶望して、精神上の幸福をもとめる、これなら順が立っていますよ。万事こうこなくちや、空論だけの人生観は私は信用しないタテマエなんです」

ヤス子は人生探求というタテマエだから、悪徳に対しては一応甚だ寛大で、あるがまゝ、全てを一応うけいれて、という心構えであった。編輯などのことでも、啓蒙とか主義主張も、先ず第一に面白く読ませること、それに気がつく女であり、美名とか、たゞ破綻がな

いという文章などにはだまされない着実なところがある。

誘えば一しよに酒席にもつらなり、ダンスホールにもつきあってくれる。けれども、私をジロリと見る。それは警戒の意味ではなしに、性格的な対立からくるものであった。そこで私は、この夏川ヤス子も、必ずやモノにしなければならぬと天地神明に誓いをたてた。ある日のこと、私がおくられて出社すると、意外にも、衣子の長女美代子が夏川ヤス子と話をしているではないか。

これが又、小娘ながら、やっぱりジロリの小娘で、何がさてジロリの母からジロリの観察によつて私の内幕を意地悪く吹きこまれているに相違ないから、一人前でもなくせに、てんから私を見くびっている。こういう未成品のジロリは小憎らしいもので、衣子家飼いならしのよく吠えるフォックスステリヤ、その程度のチンピラ小動物に心得て、かねて私の敬遠していた存在であった。

「これは、これは、姫君、よくこそ、いらせられた。意外な光臨じゃないか」

自宅にいと、こんな時には即座にジロリ、つゞいてパイと座を立つところだが、さすがに小娘のことで、やゝ俯向いて、クスリと笑っている。

このチンピラがなぜ又ヤス子を訪れたかと云えば、これが又、意外きわまるものであつ

た。

美代子が附属の女学校へあがったころ、ヤス子は大学英文科評判の才媛で、全校の女王のような存在であった。美代子はチンピラ組の女王であったが、かねて大女王にあこがれたあげく、自分も成人して大学英文科にはいり、あのような御方になりたいと思いつつて、ラブレターのようなものを差上げて、ヤス子にコンコンと諭されて嬉し涙を流すという古いツキアイの由であった。あげくに初志を貫徹して、目下大学英文科御在学であり、小娘の一念、あなどるべからずである。

戦禍のドサクサ以来音信も絶えていたが、このたび我が身にあまる悩みの種が起つて、姉君に相談したいと手をつくして、住所をつきとめ、かくてわが社へ御来臨と相成つた次第の由、悩みの種とは、申すまでもなく、例の縁談のことであった。

さて姉の君を訪れてみれば、こは又意外、かのエゲツなきヤミ屋の奴めが社長とくる。姉の君の御威光は大したもので、私に対しても、手の裏を返したように、フオックスステリヤではなくなつた。

美代子は縁談の相手の男、種則という婦人科医者が嫌いだという。然し私の見るところでは、種則が嫌いではなく、嫌いになろうとしているだけだ。彼女が嫌っているのは、こ

の縁談のフニキなのである。

少女のカンはたしかであるから、この縁談にからまるお家騒動的フニキをかぎだして胸をいためているのである。

「実は私も、その話では、かねて大浦先生の依頼をうけて、美代子さんの御心労とはアベコベに、なんとかマトメてくれというお話があつたんだよ。美代子さんのような可憐な小鳩を敵に廻しちや、私も地獄へ落ちなきやならない。私も心を入れかえて、美代子さんの氣持を第一番に尊重して、犬馬の勞をつくしましよう」

こうマゴコロをヒレキする。するとチンピラ動物はとたんに喜んで、実は私は、別に好きな人があるのだなど、言いだした。こんな文句をまともにきくと、とんでもないことになる。

この病院に岩本という婦人科の医者がいた。まだ三十だが、手術は名手で、患者の評判が甚だよろしい。大酒飲みで、生一本の男であるが、それだけに、粗野で、私同様、ジロリの女に軽蔑毛ぎらいされる男であつた。

この岩本が美代子を自分の女房にと衣子にそれとなく申入れていたのだが、商売柄、女のことで浅からぬ経験があるくせに、持つて生れた性格は仕方のないもので、性格だけ

の手法でしか女の観察ができないためか、衣子に内々嫌われていることに気がつかない。患者の評判がよろしいから、衣子も大切にする。岩本の申込みもていよくあしらい、気をそらさぬように努めているうちに、今度の縁談であるから、岩本が持ち前の強情で、対抗的に談判を開始する。あらたに聳たるべき人物は、婦人科の医者であるから、自分の地位にも関係する問題であった。

この岩本を美代子がかねがね最も嫌っていたのであったが、大浦種則の縁談が起る、そして私が一肌ぬぎましよう、とこうであると、実は私、岩本さんが好きなのよ、と言いだした。これ実に、私という存在に対する無意識の軽蔑の如きものであり、巧まざる嘲弄、もしも私以外の然るべき人物が一肌ぬぎましよう、と持ちかけたら、こんな軽ハズミなことは言わなかったに相違ない。

「おや／＼美代子さん、それは本当ですか。そんな言葉を、私がそっくり岩本先生にお取次する、そのとき、岩本先生が、例の猪の如き早のみこみをもって、得たりとばかり、あなたをさらってお嫁にしてしまう。悲鳴をあげても、あの猪の先生にかゝっては、もう、手おくれですよ」

と、眼にやさしい笑みをこめて睨んであげる。美代子はクスリと笑って、返事をしない。

こうして見直すと、成熟しかけたジロリの娘、親の顔にやゝふくらみを持たせ、目は細からずパツチリしているが、やっぱり全体どことなく薄く、白々と、父親の酷薄な気性をうけ、父の性もうけ、情火と強情と冷めたさをつゝんで、すすくと延びた肢体、見あきないものがある。

そこで私は、この小動物も、万苦をしのび、いつの日かモノにする折がなければ、生れいでた主意がたゝぬと、堅く天地神明に誓いをたてた。

私は然し、肉慾自体に目的をおくものではなかった。金龍の手練は美事であつたし、謎のゆたかな肉体というものならば、私程度の遊び人は、誰しも一生に五人や六人その心当りはあり、然し、そのようなものによつては、我々のグウタラな魂すらも充たされぬものであることを知っている筈のものだ。

私はすでに三十のころから、単なる肉慾の快楽には絶望していた。

恥をお話しなければならぬが、私が金龍にコキ使われ、辱しめに堪え、死ぬ以上の恥を忍んで平伏してふし拝んだり、それというのも、肉体のミレンよりも、そうすることが愉快かつたからである。

私というものは、金龍にとっては歯牙にもかけておらぬ奴隷にすぎず、踏んだり蹴つた

り、ポイとつまんでゴミのように捨て、金龍は一秒間の感傷に苦しむこともないのである。男女関係に於て、その馬鹿阿呆になりきること、なれるということ、それが金龍を知ることによつて、神に授けていただいた恩寵であり宿命であつた。

三人のジロリの女を射とめなければならぬこと、そしてそれが特にジロリの女でなければならぬこと、これ又、私の宿命である。

こう言いきると、いかにも私がムリに言いきろうとしているように思われるかも知れないが、ムリなところは更にならない。あべこべに、私の生きる目的が、もはや、これだけのものだ、とハッキリ分つてしまったことが、切ないのである。自分の人生とか、自分の心というものに、自分の知らない奥があり、まだ何かがある。そう感じられる人生は救いがあるというものだ。

私のように、自分がこれだけのものだと思つてしまつては、底が知れた、あとがない、又キサシならぬ重量を感じる。首がまわらぬ、八方ふさがり、全体がたゞハリツメタ重さばかりで、無性にイライラするばかり。

そのあげくには、自分の人相がメツキリ險悪になつたという、鏡を見ずに、それが感じられる変な自覚に苦しむようになった。

目薬をさしたり、毎日ていねいにヒゲをそったり、一日に何回となく顔を洗ったり、できれば厚化粧のメーキアップもしたいような気持になるのも、美男になりたい魂胆などでは更になく、たゞ人相をやわらげたいという一念からだ。

私は然し、こうして三人のジロリの女に狙いをつけても、決して恋愛の技術などに自信のあるものではなかった。私はたゞ目的に徹し、目的のためにのみ生きることには自信をかけていた。そして、目的のためにマゴゴロをさゝげる。したがって、この御三方にマゴゴロをさゝげる。私の知る口説くしきの原理はそれだけであつた。

私など本来のガラツ八で、およそ通人などゝいうものではなく、又、もとより、人間通でもない。だから、堅く天地神明に誓いをたてて御婦人を追い廻しても、悟らざること甚しく、恋いこがれ、邪推し、千々に乱れて、あげくには深酒に浮身をやつす哀れなキリギリスにすぎなかつた。

もつとも、色道はこれ本来迷いの道であるが、私などはその迷いにすら通じてはおらず、こしかたを振りかえればサンタンたるヌカルミの道であつたが、後世のお笑い草に筆をとるのも、今は私のはかない楽しみである。





十九の娘の縁談など、いうものは、男が好きだの嫌いだと云つても、恋愛感情によつてじやなしに、全然浪漫的気分によつて自分の人生を遊んでいるに過ぎないようなものだから、好きも嫌いも、ちよつとの風の吹き廻しで、百八十度にグラリと變つてすましたものだ。

岩本は芸なし猿で、美代子に直談判して、大浦博士と衣子に關係があること、今度の縁談はていよく病院を乗取る魂胆だというようなことをきかせたものだ。美代子は内々そのフンイキを感じて怖れていたのだから、これを別の人の口からきかされたら話は別だが、それによつて利益を得る本人が自ら言つてはブチコワシで、事の当否にかゝわらず、綺麗ずきの娘心が立腹するのは当然である。

あなたは卑怯者、脅迫者だと云つて、美代子は即座に岩本に最後の言葉をたゞきつけた。美代子の激昂はそれだけではおさまらず、衣子を面詰して、私のことをダシに使わず、お母様自身大浦博士と結婚したらいいでしょう、と罵った。まだそれでも、おさまらない。大浦博士を同じように面詰した。つゞいて、大浦種則を面詰した。

そのとき、種則が、まごゝろをあらわして罪を謝し、

「然し、美代子さん、僕はあなたのお母さんと僕の兄とのことなどは毛頭知らなかったのです。まして僕には、富田病院を乗取るなど、いう魂胆のあるべきものではありません。

なるほど、この縁談は兄のはじめたことですが、今となつては、あなたは僕にとつて、なくてはならぬ御方です。あなたの財産などは欲しくはありません。欲しいどころか、くると云われても、コンリンザイ受取るものではありませんよ。僕はたゞ、あなたゞけが欲しいのです。僕が贅になるのじやなく、あなたをお嫁に欲しいのです。兄のはじめた縁談とは別に、改めて僕自身からの求婚を考慮して下さいませんか」

と、きりだした。そして、ともかく、二人だけで、もつと冷静に話しあつて下さいませんか、と云つて、帰るといふのを送つてで、喫茶店で話をしたが、美代子は、母と大浦博士との問題がある限り、これ以上の汚辱を加えることはできないと席を蹴つて、その足で、私の社へかけこんだ。

美代子はもう家へ帰りたくないからヤス子の家へ同居させてくれ、そして私の社で使つてくれ、というのだが、もとより一時のことで、いずれは心が落付く、然しそれまで、ともかく一日二日はヤス子さんに泊めていたゞくがよろしいかも知れません、と私がヤス子

にささやくと、ヤス子はしばらく考えていたが、やがてハッキリと私を見つめて、キツパリと、

「私のうちはお泊め致しかねるのです」

という。問いつめてみると、自分の良人はダラシなくなり、女中には手をつける、同居の娘や人の奥さんにも怪しいフルマイをしかける、だからお泊めできないのだ、とハッキリ言った。

「敗戦を口実にするのが、卑怯なのです」

と語気強くつけたしたから、私もいさゝかその割り切り方に反撥を感じて、

「然し、ヤス子さん。敗戦を口実にと云いますが、敗戦の場合はいかにも口実がハッキリして良く分るからよろしいが、いったい、我々人間が、口実なしに、罪を犯しているでしょうかね。人間の弱さを、そんな割りきった角度から安直に咎めたるのはどうでしょう」  
こう良人を弁護してやるのも、彼女自身への思いやりというものだ。女房が亭主を罵倒しても、それにオツキアイをしてはいけない。夫婦はいつも夫婦であるということ、我々他人は心得ておかねばならないのである。こう言っておいて、

「そうですか。それでは、今夜一夜は、私のうちへ、ヤス子さんも一緒にお泊りになつて

は。むさくるしいところですが、うちの女房だけは自慢の女房で、まことに親切な女です」  
ヤス子も考えたあげく賛成して私の家で一夜をあかしたが、私はこんな機会をねらって御婦人に言い寄るような、そんな便乗的な手法は用いない。そんなことをするぐらいなら、はじめから天地神明に誓いをたてやしないのである。

美代子の話をシサイにきゝたゞしてみると、しかし、その家出の原因は、決して美代子の述べる表面だけのものではない。私は思った。美代子はむしろ、まごゝろを面にあらわして罪を謝し、兄の縁談とは別に、自分一個の求婚を考慮してくれ、という種則に好意を感じているのである。そしてその好意を感じたということが、自己嫌悪の絶叫となり、その怒りが、家へ、母へ、大浦一家へ呪いとなつて、激情のトリコとなっているのではないか。

ジロリの御婦人が二人まで私の住所へお泊り遊ばすなどは天変地異のたぐいで、二度とめぐり合う性質のものじゃない。これこそ彼女らのジロリズムを中和せしめる機会というものであるから、私自身がタスキをかけて女房よりも忙しくお勝手に活躍してあげる。その合の手に子供が喧嘩をオツパジメルとその御仲裁にも立合わねばならず、三分毎に分ぐらいはジロリストの御機嫌奉仕も致さねばならず、この忙しさは心たのしいものであ

る。

御食事がすむ、姫君方はお疲れだから、それ御寝所の用意を致せというので、私があらゆる押入をひつかきまわして有るだけのフトンをつみ重ねてあげると二尺ぐらいの高さになる。御婦人方を笑わせておいて、ともかく報告に行つてきましよう、と私は病院へかけつけた。

衣子は私の報告をきいて、

「じゃア、私と大浦先生にきまりがつかなければ、うちへは戻らぬと申したのですか」

と、例のジロリを私の顔にはりつけるように見すくめるから、私はカンラカンラの要領でいと心おきなく笑つて、

「いけません、いけません。そんな、お嬢さんを一人前の敵あつかいに対立なさつてはいけません。十九という年齢の浪漫精神による童話的創作というものですよ。実際問題はそんなところに有りやせんです。自分の問題は自分の問題、人の問題は人の問題、これはハツキリ区別があつて各々独立独歩のもの、事の真相に於てこの二つが交錯するというのはウソで、これは専ら心緒の浪漫的散歩に属するヨケイ物です。奥さんと大浦先生に属することは、これはもつぱら御二人だけの問題、美代子さんに気がねがあつては、却つてウソ

「というものです」

衣子は大浦との秘密が私どもの目にさらされたということに腹を立て、いるに相違ない。とりも直さず、その心では私に対して益々イコジにジロリズムに傾く一方である筈であるのに、

「ネエ、三船さん、なんだ、そんな女かとお思いなんでしょう」

こう言いながら、本来ならば、こゝでジロリのあるべきところを、あふれた色ツぽさで、クスリと私に流し目をくれた。私は思わずヒヤリとした。まったく私は心の凍る思いで、にわかに放心したほどである。

こんな時にどんな返事をしてよいのやら、まともな返事はバカみたいだし、はぐらかしてもバカみたいだし、私はまったくこうなると、幼稚園の生徒みたいで、

「だって、私は、惚れたハレタ、そのことしかほかに一生まともなことを知らないような奴ですもの、ようやくホットしたようなものですよ。人間万事、そうこなくっちゃア、失礼ながら、ほかのことではテンデ無策無能ですけど、その方面の御心痛については、いつなりと犬馬の労を致しますとも。これが私どもヤクザの仁義というもので、そこまでクダケテ下さらなくちゃア、人間らしくつきあっている気が致しません。左様然らばは、願ひ

下げです」

美代子が戻らないものだから、電話で話し合つて、大浦博士がこちらへ訪ねてくれることになつている。それで衣子の流し目、あふれたつ色ツポサも一瞬の幻、あとは又、とりつく島もないジロリ婦人に戻つたが、私はそれで満足であつた。

私は然し、大浦博士なる人物は、予想以上の強敵、怪物であることを痛感した。事情をきゝ終り、衣子を慰めて、私と共に病院を辞した博士は、私を酒席に誘つた。

博士の念頭にあることは、衣子や美代子ではなく、もつぱら夏川ヤス子であつた。博士の親戚の娘にヤス子の同級生がいるとか、然しそのうえに、博士はヤス子の盲腸を手術しているのであつた。

「すると夏川ヤス子夫人は三船君の特別秘書というわけだね」

「御冗談仰言つては困ります。そんなことを申上げては、あの御方は柳眉を逆立てゝ退社あそばすです」

「然し、君、社長と美人社員なら、先ず、そんなところだろう。なんにしても、本来、筋のよからぬ会社のことだからな」

「まあ、まあ、おやき遊ばすな。あなた方、病院内の生活はいざしらず、ヤミ屋の仁義は

御婦人を手ごめに致さぬところにあるものです。かの御婦人は、我々の仁義を諒とせられて、目下、下情を御視察中のけなげなる美丈夫というものですよ」

「然し、おぼしめ思召しはあるだろう」

「それは、あなた、木石ならぬ我が身です」

「アツハツハ」

大笑一番、ふと私に盃をさして、

「これは面白い。ヤミ屋にくらべると、私たちはヤボかも知れん。君らが物質的である以上に、私らはフィジカルだからな。私は君の会社へ遊びに行くよ。夏川夫人に御交際を仰ぎにさ。よろしく頼むぜ。敗戦このかた身辺ラクバクたるもので、とんと麗人の友情に飢えているから、千里の道を遠しとせずさ」

「先生のような強敵が現れちやア、これは困るな。御手やわらかに」

と、私もウマを合せておいたが、よしよし、これ又、一つの展開である。すべて現れいでる新展開は、身にいかほど不利であろうとも、不利も亦利用またしうるもの、この心構えのあるところ、いかなる不利の展開も歓迎せずということはない。私はむしろ、新展開を祝福した。



然し、その翌日、早くも、彼が私の社へ姿を現したときには、私は怒りに目がくらんだ。なぜともなく、絶望にうたれた。私は彼を殺してやりたいと切に思った。

私らヤミ屋のガサツな新装にくらべて、古いけれども上品高価な衣裳の何と心憎いことであつたか。彼の来臨は光を放つて社屋を圧倒するような落付いた余裕があつた。こうなれば、死んでも負けられぬ、と私もムキに力んだものだ。



半生、タイコモチ然と日陰の恋に浮身をやつして育ち上つた私は、今日なにがしの金力を握つて一ぱし正面切つてみても、恋の表座敷では、とんとイタにつかないミスボラシサを確認したにすぎないようなものだった。

大浦博士がわが社へ現れた時は、ちょうど家出中の美代子も来合してヤス子と一しよに居たものだから、博士は美代子とヤス子を食事に誘う。ヤス子に紹介の労をとつた私がその場に居合わせるにも拘らず、てんで私の無きが如く、お世辞にも、私を誘いやしないから、私は煮えくりかえる怒りに憑かれたが、又、感心せずにはいられなかつた。

もとより私のことだから、誘われなくとも、ハイ、では、参りましょう、と、御婦人方の荷物を持ってあげて、お忘れ物は？ 私が誘ったようなグアイに、それぐらいのことは又かりがない。

その代りには、大浦先生いざまずアレへ、お嬢さん方、こちらへ、とんと旦那とその令嬢と、私が番頭みたいなもので、あげくにお会計は私がいそいそと払うことになるのだから、あさましかりける次第である。

私は嫉妬というものに人一倍身を焼くくせに、人の恋路に一応の寛容を持たざるを得ず、その道の手腕に敬服せざるを得ないという因果なデイレッツタントでもあり、敵ながら大浦博士に内々感服しているのだから、私はまったくバカバカしい。

彼はたしかに達人であった。恋路の育ちが、私と違う。人の育ちもあるかも知れぬ。

彼は言い訳をしないのである。衣子と自分の秘密は、すでに我々に知れている。富田病院の資産に対する色目、それもカングラレているようである。そんなことの言い訳は一切合切やらないのである。

そして言い訳の代りに、ヤス子を口説くのもいきなり露骨に口説きはしないが、私はあなたが好きです、あなたは美しく又才気あるまことに敬服すべき麗人だという心の程を折

あるごとに匂わせる。美代子に対しても同様、あなたのような可愛らしいお嬢さんは二人とあるものじゃないという敬意と愛を言動の要所に含めることを忘れておられない。

なまじいの言い訳は、とるには足らぬ。御婦人に対しては、まさしく彼の如くに、御当人への尊敬と愛とが、何よりすぐれた言い訳にきまつているのだ。

そういうことを知ってはいても、私などは育ちが下根<sup>げこん</sup>で、ぬけぬけとそうはやりきれずに、つい女々しく、イヤミツたらしく言い訳に及んでしまうテイタラクであるから、まことに敵が憎く、また口惜しいのだが、偉い奴だと思わずにもいられぬ。

翌日、ヤス子は大浦博士を評して、あまり凶太い、まるでカラカワレテいるようで不愉快に思った、と言っていた。私は内々大喜び、よくぞお気がつかれた、というところであるが、それでは大人物らしくないものだから、イヤ、人間は、凶太いということ、善良さとは無関係なものですよ、変に小心ヨクヨクたる奴が内々はフテクサレのミミツチイ嘘つきのホラ吹きなどは、よくある奴ですよ、など、言う。

「え、紳士はあのようなものかも知れません」

と、ヤス子はつゝましく考えこんで、

「でも、私は、あのような紳士の型に好感がもてないのです」

と、言った。

そんな言葉をマにうけて、胸に大事に守っているから、私はバカだ。すべて紳士というもの、そのジロリをジロリでなくする。さればこそ、恋も浮気も四十から、そうきまったものではないか。一目見て、惚れ合った、胸がワクワク、恋の歓喜、バカバカしい。好き合ったなら、それだけのことじゃないか。狐も蝉も秋の夜の虫も森にすだく、ツガもないこと、若気の恋は人も虫も変りはない。ジロリをジロリでなくすること、それを人生の目的の如くに心得ている私でありながら、私というバカは、御婦人の快い言葉をいとも大事に胸の宝にだきしめているのだから、私はダメな人間である。

二週間も後になると、もうヤス子は、あの方は立派な方、というようになっていく。にわかには私が慌てる、もう、おそい。



美代子はともかく家へ戻った。送りどけた私は、衣子に向って、

「ねえ、奥さん。あなたがこの縁談に不満なのは、入贅、そしてお躰さんが当病院の後継

者、その条件が御不満なのじやありませんか。ところが、大浦種則氏は美代子さんに向つて、自分もこの条件に賛成ではない。兄博士からの縁談は御破算にして、自分一個と美代子さん、自分が美代子さんをお嫁にいたゞく、改めてそれを考慮していたゞきたいと言つたそうですよ。美代子さんはそれをブリブリ怒っているのですが、これが娘心の秘密という奴なんで、実は大浦種則氏が好きになつた、好きになつたということが納得できないもので、アベコベに御立腹遊ばされておるといのが実状だと私は見立てた次第です。御兩人が内々好きあつており、共に入贅ということに御不満で、兄博士の申入れとは別個に、自分たちだけの結婚にしたいという御意向の様子ですから、成行きにとらわれず、内々の御希望通り、まとめてあげては如何なものでしょう」

と申上げた。すると衣子は、そうですか、考えてみましょう、など、は言わず、例のジロリと一ベツをくれて、

「ずいぶん、ワケ知りですことね」と突き刺した。

そんなジロリはお構いなし、というのが、私が金竜から得た教訓で、このジロリはつまり承諾の意と解し、ひとり合点の要領で、シヤニムニ自分勝手にオセツカイを取りはから

う。そのアゲクが柳眉を逆立てられることになったら、そこは又そこで、窮余の奥の手にするのである。私自身がオツチヨコチヨイの窮地へ落ちこむことによって、おのずから虎穴に虎兇をつかむのが要するに私の要領というものだ。

私はさつそく大浦種則を訪れて、兄さんの申込みとは別に、あなた自身から衣子夫人に申入れをなさい。そして、美代子さんをお嫁に貰う、持参金などビタ一文いりません、という赤誠がありや、奥さんも令嬢も、内々はその気持があるんだから、こゝは決行の一手あるのみ。マゴコロと不撓不屈の情熱です、といってケシかけた。

すると種則は患者の容態をきいているような愛想のよさはあつたけれども、私の厚意に狎れるような反応はなく、たゞうなずいて、

「なるほど、うむ。我々二十の世代は失われた青春ですな。先ず、失われた情熱というものを探しもとめて行かなければならないのですよ」

と言った。私は小僧にカラカワレているように不快であつた。彼の言葉には実感などは何もなく、通り一ペンのカラ念仏でお義理の返事をまに合わせておく。つまり私というものを、軽蔑、無視しきつた態度としか受取ることができないのだった。

いわば女のジロリの相対的な敵意や反撥よりも、もっと思い上り、大人ぶり、見下して

いる態度であつた。

「ハハア。情熱というものは、探すものですか。失われた青春てえと、なんですかな、どこかへオツコトしていらせられたわけですか。青春てえものは、ふところのガマ口みたいのもののかな」

「空白な世代ということですよ。戦争のおかげで、我々の青春は空白なのですな」

「なにが空白なものですか。恋の代りに、戦争をしていたゞけじやないですか。昔の書生は恋も戦争もせず、下宿の万年床にひっくりかえつてボンヤリ暮していたゞけさ。空白な世代などという人間の頭だけが空白なのでしょう」

「世代の距りですよ」

と、オーヨーに莞爾と、こう仰せられて、紫煙を吹いておられる。頭の悪い男なのである。それだけ、女には巧者なのかも知らない。軽蔑したわけではないが、なんとなく、此奴ウスバカ、と反撥して軽く片づける気持をいだいてしまったのが、またしても、失敗のもと、バカでも、ウスノ口でも、人間そのものが元々タンゲイすべからざる怪物なのである。この心得を忘れがちな私はまことにアサハカであつた。

私は美代子に、

「大浦種則さんて方は、ちよいとしたハンサムボーイじゃないですか。あんまり御利巧じゃないかも知れないが、御利巧など、いうことは紳士の資格に不要なことなんでしょう。その日その日を一緒にホガラカに暮せる、それが紳士の才能でしょうから、つまり種則さんは紳士であり、ハンサムボーイというもんじやないか。花の青春に、英文学などひもとかれるよりも、ハンサムボーイの心臓とキンミツにレンラクをとられる方が淑女の道だと思うんだがなア」

と、内々の胸のうちをクスグツテあげる。ヤス子には才媛の高風があり、文学を学んでおかしくない自然なところもあるけれども、美代子と文学は本来ツナガリがないのである。御当人も英文学をひもとくよりは映画見物が性に合っていることを御存知で、内々は学問に見切りをつけていらせられるのだが、私がこんな風にクスグツテあげると、忽ちツンとして、例のジロリをやる。

衣子がまた私にオカンムリのていで、

「三船さん、オセツカイはよして下さい。あなたはガサツすぎますよ。騒々しいのよ。よその家庭へガサツを持ちこんで、迷惑をお気づきになることも出来ないのね」

「これは失礼いたしました。然し、これは犬馬の労というものですよ。ガサツは生れつき



だから仕方がないけど、マゴコロを買っていたぐかなくちやア」

「マゴコロは押売りするものじゃありません」

と、カンシヤクが青白い皮膚の裏にビリビリ透いている。私という人間は、そのとき如何にも心外で、恨みと悲しみに混乱しながら、又一方に、そんなところに色気に打たれてムセルという、奴隷根性が身にしみついているのであった。

そして、私に締め出しをくわせて、縁談はすゝめられていた。ところが、大浦種則というウスノロ先生が、却々もつて、タダのネズミではなかつたのである。

種則は美代子に向つて、入贅になつて病院をつぐ、財産を半分貰うなどとは自分の意志ではなく、自分は美代子さんの外にビター文欲しいわけじゃないから、兄の話とは別に、自分一個の申込みについて改めて考慮してくれ、とシオラシイことを言った。

そして実際、衣子に直談判をはじめて、赤誠をヒレキするところがあり、押の一手、まったく押の強い男で、衣子よりも、美代子の心をほぐしてしまった。

日曜ごとに美代子を誘う。夜になると、たいがい病院へ遊びにくる。とうとう毎晩現れ、我が家同然、こうなると、美代子にもわかにかえって私にジロリ、つれなくなる。ここが私の至らざるところで、こうなると、私もムキになり、それではとヤス子をつれて病

院へ行く。崇拜する姉君の社長の貫祿という奴をお見忘れがないように、というアサハカ  
な示威戦術であるが、私という奴はいったん、弱気になるとダラシがなくて、今はもう、  
病院を訪れるには、ヤス子の同伴がなくては恥辱を受けるような不安があつて、毎々ヤス  
子を拝み倒すのであつた。

「私は、あなた、それは元来が小人物ですから、腹も立ちますよ。察しても下さい。美代  
子さんが内々は実は大浦種則氏を好いていると見抜いて、それとなく御兩人を結び合して  
あげようと犬馬の勞をつくしたのが、私ではありませんか。それをあなた、できてしま  
うと、オセツカイな邪魔ものみたいに、私を辱しめ、なぶりものにする。とかく苦勞を知ら  
ない人は、そんな風に、好意とマゴゴロもてかしく人を、なぶりものにして快をむさぼ  
るものではありませんがね。私だつて、腹が立ちますよ。それでも、私という人間は、そん  
なにまで踏みつけられても、いったんマゴゴロをもつて計った事の完成を見るまでは、附  
き添つてあげたいのです。いえ、付き添つてあげずにいられぬ性分なのです。こゝのここ  
ろを、お察し下さい。ですから、踏みつけられても、私は遊びに行かずにはいられないの  
ですよ。そこで、あなたに御同伴をお願いする。すこしでも、みじめな思いが少いように、  
そして、みすぼらしさを自覚せずにするように。私はねえ、ガサツな奴ですよ、然し、至

って、小心臆病なんです。私はみじめな思いを見るほど、悲しいことはないのですよ。悲しい思いほど、私の人生の敵はない。これを察して下さい、夏川さん」

こうやって、底を割ってみせるのも、私の示威だ。どうせジロリの相手なのだから、むしろ楽屋をさらけだす。衣子や美代子には、親切気などないけれども、ヤス子は頼まれ、ば、人のためにも計ろうとする気持があつた。

「ヤス子さん。三船さんの新聞社などお止しあそばせ。ヤミ会社の社員なんて、人格にかゝりますわ」

と衣子が言う。ヤス子はすこし考えて、それから、キツと顔をあげて、

「新聞の仕事そのものはマジメな仕事なんです。私、かなり、やりがいのある仕事のつもりで、精一杯やっていますわ。社長さんの編輯方針にも、時々不満はありますけれど、概して、共鳴することが多いのです」

ヤス子は嘘がつけない。ジョークを解さぬわけではないけれども、先方の軽い言葉が、ヤス子にとって軽視できない意味があると、本当のことしか言えないという気質であつた。冗談のつもりで話しかけて、居直られるようなことになりがちだから、衣子はヤス子を煙たがり、親しみをいだいていなかった。

「ヤス子さんも、可愛げのない人ね。あんなに居直るみたいに談じこまれちゃ、旦那様もオチオチくつろげやしないわね」

と、衣子は私を意地悪くジロリと見て、言う。

「それは、あなた、話というものは、ピントが合わなきや、仕様がない。ヤスさんは、奥さんとはピントが合わないかも知れないけれども、ピントの合う人にとっては、あんな可愛げのある御婦人もメツタにありやしませんよ」

「三船さんはピントが合うつもり？　でも、ヤスさんは、ピントが合わなくて、お困りの御様子ね」

すると美代子のチンピラまでが、私にジロリと一べつをくれて、

「社長と社員でなかったら、おそばへ寄りつくこともできない筈ね。ヤミ屋の御時世よ。インフレの終ると共に、誰かさんの三日天下も終りを告げます」

恋は曲くせもの者である。あれほど崇拜の姉の君を、美代子も内々煙たがるようになっていたのだ。けれども、それを意識せず、あげて私への侮蔑となつて表れてくる。

ところが、この恋が、却々うまく行かないのだ。

大浦種則は美代子さんだけが欲しい、ビター文欲しいわけではないと仰有る。

ところが、兄の博士が、ドツコイ、そうは勝手にさせられませぬ、と膝を乗り入れてきた。当節、学者の生活ほど惨めなものはない。医学部教授はまだしもヨロクがあるとは云つても、タカの知れたもの、酒タバコの段ではなく、必要のカロリーも充分にはとれぬ。本も買えぬ。火鉢の炭のカケラにまで御不自由のいたらくで、かねて多少の貯えなどもインフレと共に二束三文に下落して、明日の希望もないようなものだ。

弟の種則には分けてやる一文の財産もなく、礼服一着こしらえてやれぬ。花嫁の然るべき持参金が頼みの綱であるから、富田病院という名題の長者の一人娘に持参金もないような、そんなベラボーな縁談には賛成するわけに参らぬ、と仰有る。もとより、美代子の思いが充分以上に種則に傾いたのを見越した上で、潮時を見はからつて、膝を乗り入れてきたのである。

だいたい、婚姻政策というものは、政治家や官僚以上に、学者に於て甚しいものだ。そうであるが、大浦博士に至つては、結婚と持参金、あたりまえときめてかゝつた殿様ぶり、天下泰平、オーヨーなものだ。

かねて自分一個の赤誠をヒレキする種則のことであるし、新憲法と称し、家の解体、個人の自由時代、兄博士の横槍もヘチマもある筈がないと思うと、あにはからんや、脱兎の

如き恋の情熱児が、にわかにはニカンで、ハムレットになった。

結婚すれば、兄の家も出なければならぬ。自分はまだ研究室の副手にすぎず、独立して生計を営む自信がないから、兄の援助を断たれると、直ちに生活ができなくなる、純情や理想の問題じゃなく、現実の問題だから、と云つて、暗然として面を伏せ、天を仰いで長大息、サメザメと暗涙をしばらくの御有様とある。

あげくに美代子をそゝのかして、家出をした。

十日あまりして、兄貴のところへ旅館の支払いの泣き手紙が来て、大浦博士が箱根へ急行して取り押えたという結末であるが、戻ってくる、こうなつた以上は結婚を、という、衣子もその気持になつたが、ドッコイ、大浦博士が居直つた。是が非でも、財産の半分の持参金がなければ、結婚はさせられない、というのであつた。動産、不動産、病院の諸設備に至るまで財産に見積つて、その全額のキツチり半分、ちゃんと金額を明示して、これだけの持参金があればいかぬ、という。税務署の査定よりもはるかに厳しく、自分勝手に、そんな持参金を持ち出されては、病院の運営もできない。

「これは、あなた、サギですよ。まるで、男のツツモタセみたいなものだな。もちろん、種則も、兄貴の博士とグルですとも。よろしい。見ていてごらんなさい。私が泥を吐かせ

てみせます」

と、種則に来てもらい、衣子と私の面前にすえて、さて、大浦君、と、私が訊問にかゝろうとすると、にわか衣子の様子が變つて、当の敵は私であるかのよう、青白く冴えた面持、キツと私を見つめて、

「この話は当家の恥ですから、内輪だけで話し合いますから、三船さんは御ひきとり下さいね」

女中を呼びよせて、

「三船さんが、お帰りです」

有無を言わず、宣告を下す。ここまで踏みつけられては、私もたゞは退き下れぬ。

なるほど、私が種則をよんで泥を吐かせましょう、と持ちかけた時に、衣子はすゝんで賛成するようなどころは無かつたかも知れない。けれども、一言といえども反対の言葉は述べなかつたのだから、そして、私が電話で種則を呼んでいるのを黙って見過していたのだから、これを賛成と見て怪しからぬところは有り得ない。

ところが、種則が現れる。とつぜんガラリと、こう、くるのだから、私にもわかにかゝレ上つて、

「ハア、そうですか。然し、御当家の恥というのを、一から百まで承知している私ですよ。これから先をお隠しになったところで、頭かくして何とか云うイロハガルタの文句みたいじゃありませんか。私はたゞ御当家のために良かれと」

皆まで言わせず、

「イロハガルタの文句で相済みませんことね。三船さんはカン違いしていらっしやるわね。当家と大浦家の関係は格別のものなんです。お分りになりませんこと。親戚以上の大切なもの。当家と三船家の比較にならない格別のものですよ。ですから」

と言葉を切つて、凜然たる一睨み、こうなつては尻尾をまいて引退るほかに仕方がない。芸人は引ツ込み方が大切なもので、気のきいたところをピリリとひとつ、それだけのユトリがあらばこそ、尻尾をまいた負け犬よりもシヨボくと、その哀れさ。

それでも廊下を通り玄関へきた時には、急にムクムクとふてくされて、河内山の百分の一ぐらいの悪度胸で居直り、

「オヨシちゃん。私を暫時、女中部屋で休ませて下さいな」

「アラ、そんな」

鼻薬を握らせて、



「お酒でも、買ってきて飲ませてくれると、オヨシちゃんも、女中なんかはさせておかないと言う人がアチラコチラから現れてくるだろうがな」

と、女中を相手に、からかいながら、待っている。

種則の帰るを待つて、茶の間へヌツと推参、もとより、御不興は覚悟の上である。衣子はイマイマしげに、また、いかにもウルサげに、ジロリと一べつ、顔をそむけて、喋らない。

「いかなるテンマツとなりましたか」

「どんなテンマツがお気に召すのですか」

ハッタと、にらむ。私はビツクリ、すくみながら、その色気に目を打たれて、ひそかに満足する。

「当家と大浦家の仲たがいが、血の雨でも降ることになったら、御満足なんですか。ゴセツカイに、チヨロく、なに企んでいるのです」

「チヨロく、何を企むったつて、屋根裏の鼠がひそかにカキモチを狙うんじやあるまいし、それは、奥さん、あんまりですよ。私だつて、一人前の男、四十歳、多少の分別はありますよ。失礼ながら温室育ちの奥さんに比べりや、数等世情に通じているからこそ、見るに

見かねて、いえ、やむにやまれぬオセツカイ。ほんとですとも。毒殺ぐらい覚悟の上で、いえ、失言ではありません。坊主と医者てえものは気が許せませんや。年中扱いなれていやがるから、トンマな赤鬼よりも冷静なもんですよ。私は何も企みません。大浦一家が何事か企んでいると申上げているにすぎません。私の場合は必死の善意あるのみです」

衣子はプイと横を向いて答えない。

その言葉や様子から、私の推量と同じような結論を衣子もつかむに至ったのだろう。私はそう見てとつて安心したが、図にのつて、こまかくせゝくるとゴカンムリをまげさせるばかり、万事は時期というものがある。

「私の公明正大な心事ばかりはお察し下さい。私のカングリがあさはかな邪推に終わりました折は、見事に切腹して、御当家ならびに大浦博士にお詫びします。私は事をブッコワそうとしているわけじゃありませんよ。事の円満なる解決に就て不肖の微力をおもとめなれば、何を措いても犬馬の労をつくす所存、又、その労苦を身の光榮に感じているものがあります」

なぞと、たゞそれとなく脈をつないでおくだけで、その日はおいとまを告げた。



あの夜、私は衣子にていよく追つ払われて、大いにヒガミ、腹を立てた。私の至らざるところで、人の気持というものが分らないのである。つまり私は一ぱし人間通ぶって、あれこれとオセツカイをやるくせに、実は一人のみこみ、その上、何かというとヒガンだり腹を立てたり、人の気持を察してやることができないのだ。

衣子にしてみれば、娘の一生の大事であるから、真剣であり、思い決し、悲痛なものがある筈だ。だから私のオセツカイを軽くかわして、私を追払い、種則と膝ヅメ談判に及んだが、私なんかゞ三百代言よろしく一寸見<sup>ちよつとみ</sup>だけ凄んでみせるのと違って、猛烈に急所を  
ついて食い下つたらしい。

いったいが、女というものは本来そうある筈で、必死の大事となると、人まかせでは安心できず、喉笛に食いつくぐらいの意気込みで、相手怖れず乗<sup>のり</sup>だす性質のものである。それぐらいのことは、かねて知っている筈ながら、私はバカだから、ヒガンだり、スネたりするのである。

新憲法の今日、一人前の男が、兄貴の気持がどうだからと云って、自分の思いを諦める

など、は奇妙な話、世間では、新憲法だといふので、若い者が仕放題、親を泣かせている御時世である。これは大方、兄弟グルで仕組んだ逃げ口上でしょう、と、衣子に問いつめられて、種則の返答が、

「いゝえ、然し一人前の男だなんて、とんでもないことですよ。大学の副手の手当なんて、配給のタバコを買うにも足りないのです。全然、生活無能者なんです」

「ですから生活できるだけの持参金は持たせてやりますし、又、月々の面倒も見るぐらいのことは致しますと申したではありませんか。無能力のバカには、それでも、多すぎますぐらいでしょう。全財産の半分とは、あなた方兄弟の肚の中は盗人根性ぬすつとというものです」

ひどいことを言う。女がドタン場で居直ると、意地悪く急所をつかんで、最大級の汚らしさで解説して下さるものだ。私のような小悪党は敵の弱所に同感もあることだから、こゝろは汚らしく攻めたてるわけには参らない。

そのとき、種則先生、こう答えたといふことだ。

「奥さんは僕の立場、理解しておられませんね。僕は兄貴と仲違いしては、生涯破滅、浮ばれなくなるのです。僕は私大の副手ですが、これも兄貴のせいで、僕の頭は特別ダメなんです。中学のとき、数学、物理化学は丁、英語も丁、漢文と国語が丙ですが、それでも

兄貴のおかげで大学へ入学もでき、副手になって、ともかく医者らしくさせてもらっているのです。医者はヒキと要領のものなんです。僕はそれに、愛想がよくって患者をうまくあしらうでしょう、これはコツですね。医局のツキアイをうまくやってポロのバレないうちは、患者にウケがいゝんです。まア、相当な、若手先生なんです。これも兄貴のおかげ、それに僕が要領を心得て、いかにも教授、先輩、同輩に好かれるように、立廻っているのです。これは、マア、僕の才能ですね。僕は人に怒られるようなことは、しないんです。ですけど、この才能が物を言うのも、バックに兄貴の威光があるからで、これがなくちゃア、誤診ばかりやらかしているものですから、本当は看護婦だって、肚の中じゃア、なめきつっているわけですね。だから、兄貴に見すてられちゃ、一気に看護婦にまで見捨てられちゃうでしょう。僕は一生、浮ぶ瀬がなくなるわけなんです」

数学、物理化学が丁、英語も丁、漢文と国語が丙、よくぞ申したり、アツパレな奴で、どんなに仏頂ヅラで怒っていても、たいがい腰がくだけてしまふ。

衣子もさすがにウンザリして、完璧な低能なのね、とからかうと、えゝ、まア、生れつきですからねえ、と答えたそうで、色事のモメゴトのあげくの力演は、概してカケアイ漫才の要領になるものかも知れぬ。これは私も身に覚えのあるところである。

然し、衣子が種則をハツタと睨んで、それでは、あなたは、はじめから美代子を弄ぶつもりで、私たちがダメしたのですね。今になって、低能とは、あなたは、兄さんの縁談とは別に、自分一個の意志で美代子をもらいたいと仰有った筈ではありませんか。それもこれも、はじめから兄弟グルの計画でしょう、ときめつけると、とんでもないことです、それは、つまり、恋の一念だったのです。

何が恋の一念ですか。一文の持参金もいらぬなど、仰有りながら、今となって、全財産の半分など、は、兄弟グルのカラクリでなくて何ですか。世間知らずの女にも、それぐらいのことは見えすいています。

そのとき、種則はやおら泣きだして、恨めしそうに衣子を睨み、

「ですから、僕は低能なんですというのに。こんなこと、誰にも言いたくないのです。僕は、恥は隠しておきたいのです。あなたは僕の悲しい思いを理解して下さらなければダメですよ。僕が兄貴に捨てられたら、僕はどうすればいいのですか。それは分るじやありませんか。僕だつて、自分がそれほど能なしのバカだなんて、思いだしたくないですよ」

ぎツとこういふカケアイ漫才の調子では、もとより埒のあく筈はない。

衣子はカンカンに立腹して、美代子に種則との絶交を申し渡し、再び会うことも文通す

ることもいけないと宣告した。

けれども、ものゝ十日とたたないうちに、再び二人は失踪した。今回は、美代子は前回の経験によつて、ダイヤの指輪とか、金時計とか、相当の金額のものを持ちだして行つたのである。心当りを探したが、行方が知れない。

これも機会だと思つたから、どうですか、ジツと閉じこもつてクヨクヨしても仕方がないから、捜査がてら保養をかねて、温泉辺りでもいかゞですか。ヤス子さんも心配していますから、三人でブラ／＼いかがです、と言つてみたが、ソツポを向いて返事もしない。

こうなると、私も意地で、私はどうも、行きが／＼りにとらわれ、押しつけがましくなつて、キレイにさばくということができず、変にしつこく汚らしいモツレ方を見せてしまう結末となる。

そこで、私は社員に三泊の慰安温泉旅行を与えることゝして、つまりヤス子と内々捜査もしてみようという、いかにも実のありそうな見せかけ、行きが／＼りであるが、マズイ芝居だ。第一、失費も大変である。

こういうマズイ芝居は忽ち報いのあるもので、こう話のきまつたところへ現れたのが大浦博士である。こういう悪漢は私の肚が忽ち分る筈であるが、そうとは色にもださず、そ

れはいゝね、僕も気がゝりで、ジツとしていられない気持のところだから、その一行に加えてくれ、費用は自弁だと言う。むろんヤス子が狙いなのである。

私もこうなればイマイましい。その肚ならば、こつちもママヨ、当って砕けると、悪度胸をきめて、何食わぬ顔、衣子を訪ねた。

「実は奥さん、ウチの社で、箱根伊豆方面へ三泊の慰安旅行をやることになったんですが、これを機会に、先々で、お嬢さんの消息も調べてみようと思つています。ところがですなア。大浦博士がこれを耳にして、ちようどよい都合だから、自分も一行に加えてくれ、という。便宜があつたら捜査にでたいと内々思つていたところだと仰有るわけです。尤も、なんです、ちようどよい都合だつて、便宜がなきや探さない、便宜てえのは変ですなア。探したきやア、さつそく御一人おでかけとあればよきそうなものですよ。然し、まあ、それは、なんです。ところで、いかゞですか。いつそのこと、奥さんも、これこそ便宜というものでしょうから、一しよに、いらつしやいませんか」

と、しらつぱくれて、言つた。

色恋というものは、思案のほかのものだ。肉体というものは、まことに悲しいものなのである。美代子と種則には爾今逢い見ることかなわぬ、など、厳しくオフレをだす衣子、



大浦博士の魂胆を見ぬいておりながら、やっぱり、まだ二人のクサレ縁は切れずにいる。

そこは大浦博士の巧者なところで、弟は疎んぜられ、己れの策は見ぬかれても、しらっばくれて、からみついている。からみついている限りは、男を蔑み憎んでいても、女の方からクサレ縁を断ちきることは出来ないものだということを、ちゃんと知りぬいていらっしやる。

男の肉体にくらべれば、女の肉体はもつと悲しいもの、ようだ。女の感覚は憎悪や軽蔑の通路を知るや極めて鋭く激しいもので、忽ちにして男のアラを底の底まで皮をはいで見破ってしまう。そして極点まで蔑み憎んでいるものだ。そのくせ、女の肉体の弱さは、その極点の憎悪や軽蔑を抱いたまゝ、泥沼のクサレ縁からわが身をどうすることもできないという悲しさである。

大浦博士がわが社の慰安旅行の一行に加わりたいたいという。ヤス子に寄せる御執心のせいである。私はしらっばくれて、意地悪くそれを匂わしてやった。私だって、腹も立ちます。これくらいバカ扱いに扱われては、そちらにも、ちよつとぐらいは腹を立てゝもらいたいものだ。あげくに私がドジをふんでも、私だって、たまにはドジをふんでも、意地わるをしてみたいものだ。

衣子がキリキリ柳眉をさかだてる。ハツタと私を睨みすくめる。ジロリと軽蔑の極をあそばす。それぐらゐは、覚悟の上だ。

と、あにはからんや、柳眉をさかだてる段ではなく、ちよつとマツ毛をパチパチさせるぐらいのことがあつたと思うと、ニツコリと、いと爽やかに私をふりむいて、

「あなた、裏口営業というものに私をつれて行ってちようだいよ。私、まだ、インフレの裏側とやら、浮浪児もパンパンも裏口営業も見ることがないわ」

「何を言つてますか。当病院がインフレ街道の一親分じやありませんか」

私はとつさに慌てふためいて、胸がわくわく、心ウキウキというヤツ、衣子の次なる言葉が怖ろしい、何やらワケの分らぬ早業で、心にもないウワズツタ返事をする。

「お巡りさんにつかまつて、留置場へ投げこまれたら、却つて、面白いことね」

なんでもない顔、私をうながしている。はからざる結果となつた。

衣子は酔つた。私が酔わせましたのであるが、衣子がより以上に酔いたい気持でいたのである。とゞのつまり、私たちは待合をくゞつた。

私という男を衣子が愛している筈はなかつた。むしろ蔑んでいる筈だ。酔つ払つた衣子は、美代子なんかどうでもいゝのよ。死のうと、パンパンにならうと、もう、かまわない。

私は私よ、と言った。ヤケクソである。四囲の様々な情勢がこゝまで衣子を運んできた筋道は理解がつくが、その四囲の情勢というヤツが、私が細工を施したわけでなく、その一日の運びすら私がたくらんだものではない。

私はいさゝか浮かない思いもあった。誇りをもつことができなかつたからだ。私は自分の工夫によつて、こゝまで運んできたかつたのだ。

私は三人のジロリの女をモノにしたいと専念する。愛するが為よりも、彼女らに蔑まれている為である。私の気持はもっぱら攻略というもので、その難険の故に意気あがり、心もはずむというものだ。いわば三人の御婦人は私の可愛いゝ敵であるが、汝の敵を愛せという、まさしく私は全心的にわが敵を愛しもし、尊敬したいとも考える。

私はわが敵を尊敬したいから、そのハシタナイ姿は見たくない。だから私は私の工夫によつて事を運び、私の暴力によつて征服したいものであり、彼女らの情慾などは見たくない。

私はどうやらアベコベに、衣子のヤケクソに便乗して待合の門をくゞつたが、もとよりそれはここをセンドと私が必死に説得してのアゲクであるが、それとは別に、私はやっぱり淋しかった。

「遊びですよ、奥さん。大浦先生と違って、私は遊びということのほかには、何ひとつ下心はないのです。私はあなたに何一つ束縛は加えませんし、第一、いつまでも、あなたと云い、奥さんとよび、遊びは二人だけのこと、死に至るまで、これっぱかしも人に秘密をもらしは致しません。私はたゞ奥さんを心底から尊敬し、また愛し、まったく私は、下僕というものですよ」

酔い痴れた衣子は、然し、もうこんな理窟は耳にきゝわけられなかった。

「どうなつたつて、いゝですよ。野たれ死んだつて、私はいゝのよ」

と、衣子は廻らぬロレツで、私の肩にすがりついて、よろめいている。それはまだしもであるが、

「ねえ、あなた」

ふと酔眼に火のような情慾をこめて私を見る。もとより理知ある人間のものじゃなくて、キチガイのものだ。私はいさゝかふるえた。泣きたかつた。やるせないものである。とは云いながら、私の胸は夢心持にワクワクしてもいるのである。

衣子はネマキに着代えずにドスンとフトンの上のところがつたが、私が寄りそつて横になると、さすがに、にわかにキリリとして、

「三船さん、ダメ」

「だって、あなた、今さら、そんな」

衣子は身もだえて、はぐみ、

「あなた、酔ってるのね」

「いゝえ、酔ってはおりません。私はひどく冷静なんです」

「私は酔ってる。ヨツパライよ。けれども、頭はハッキリしたわ。あなた、約束してくれる。旅行に行つちやダメよ。私を一人にしちやダメよ」

「えゝ、えゝ、御命令には断じて服従します。行きませんとも」

そして私は何とも悲しく、なつかしい思いになった。そして気違ひのように衣子のウナジをだいて、接吻の雨をふらしたものだ。

私はながく眠らなかつた。

衣子が眠つたのを見すますと私は起き上つて、枕元に用意させた酒をのんだ。

何か茫々とした心の涯に、悲しさもあつた。然し、あたゝかい愛情がこもっていた。いとしい女よ。私は時間について考えた。この女を口説きつゝあつた時間、心に征服を決意してからの長い時間、その時間に起つた様々の出来事ではなく、たゞその時間というもの

だけをボンヤリ意識しているだけだった。それは何か「なつかしき」というものゝ総量の  
ような感覚であった。ほかに思うこともない。私はボンヤリ酒をのんだ。



その翌日は忙しい。私は衣子との約をまもって、旅行に不参しなければならぬのだが、  
私は然し、私の行かないことは構わぬけれども、大浦博士とヤス子のことを考えると、我  
慢ができない。

私は出社して局長をよび、

「私は明日の旅行には行かないよ。私の行かない方が、みんなの慰安にもなるだろうよ。  
ところで、大浦博士だがね、こいつを君の力でなんとかゴマカしてくれないかね。この先  
生はヤス子さんが狙いなものだから、私はヤス子さんにムネを含めて、これも不参というこ  
とにしていたくつもりだが、まったく君、この先生にのさばられちゃ、たまったものじ  
やアないからな。君たちだつて、やりきれないだろう」

そこで局長と相談して、ひとつ大浦博士をこの機会にコラシメのためナブリモノにして

やろう、というわけで、伊豆へつれだしておいてから、実は社長とヤス子さんは、おくれ  
てくる筈、ほかに宿をとっている筈ですがね、慰安旅行の邪魔にならないように、最後の  
日にチョツとだけ顔をだすようなことを云つてましたぜ、昼はどこかのお嬢さんの行方  
を探しているそうです、と言つてもらうことにした。

社にいと大浦博士がやってくる怖れがあるから、ヤス子を誘いだして、

「実は、ヤス子さん、お願いがあるのですが、あすの旅行に欠席してもらいたいのです」

こう、きりだしておいて、私も意を決し、計略を立て、きたのであるから、ヤス子を近  
郊の温泉旅館へ案内して、昼食をたべた。

こういうことは、ハズミというもので、だいたい色事はそんなものだ。衣子に別れる。  
すぐその足で別の女を口説きたくなる。これがハズミで、変に度胸のこもった決意がかた  
まるものである。

まア落付いて話しましょう。こゝはつまり、鉱泉といったって、実はアイビキ旅館です  
がね、これも後学のためですよ、など、ヤス子を案内してきたが、ヤス子は平然たるもの  
であるが、テーブルに向いあつてキチンと坐つて、いさゝかも油断なく、厳然古武士のよ  
うな正座である。私は遠慮なくくつろいで、お酒をのんだ。

「さて、先刻の話ですが、この旅行、なぜ欠席していたゞきたいか、実は大浦先生のコンタンが癪にさわるからなんです。もちろん、おわかりのことでしょうが、大浦先生の目的は、失踪者の捜査じやなくて、ヤス子さん、あなたがお目当なんですな」

ヤス子は毛筋ほども表情をかえず、

「私のことは私の責任で致しますことですから、欠席は無用と存じますけど」

「いえ、そこが私のお願いなんです。これは社長の命令ではありません。お願い、つまりですな、私は大浦先生が憎らしいから、ひとつ、裏をかいてやろうというわけです」

「私は大浦先生を憎らしいとは思いません」

ズバリと云った。私への敵意がこもって見えただけども、私はこれを決意の激しさによるせいとして、たじろがない。

「だって、憎たらしいじやありませんか。美代子さんの捜査だなんて、心にもないことを云って、卑怯ですよ」

「あの場合、それが自然ではないでしょうか。つまりぬことを、わざわざ正直に申す方が、私には異様に思われます」

「これは参った。まさしく仰せの通りです。それは実は私のかねての持論の筈だが、私は



まったく、持論を裏切る、小人物の悲しさというものですよ」

こういう御婦人に対してはカケヒキなしにやるに限る。

ヤス子は初対面の博士を好ましからぬおもいで見ていた様子であるが、並々ならぬ御執心にほだされて、好意に変わっているのである。ヤス子の正義と見るものは、その人の偽りなき直情であり、その人の過去の色事などは意としておらぬ。これは最もあたりまえな女の感情であるが、ヤス子はその理知と教養と凜々しい気魄をさしひくと、つまり最もあたりまえの女であり、生半可の学問で、自分の女の本能的な感情を理論的に肯定しているだけなのだ。

もとより私は、それに相応して、想をねってきたのである。

「まったく、あさましい次第です。支離メツレツ、これ実に、あさはかな嫉妬のせいです。打開けて申せば、ヤキモチによるあさはかなカラクリ、ザンキにたえません。私はだいたい、ヤキモチが好きではないのです。私は御婦人に惚れます。私の惚れるとは犬馬の労をつくし、尊敬の限りをつくすことで、私は下僕となる喜びによってわが恋をみたくすタテマエなんです。私はわが愛人と遊びたい。愛とは遊ぶことです。その代り、踏みつけられてもよろしい。踏まれるためには、やわらかな靴となつて差上げたいとすら思うものです。

恋の下僕にとつて、愛人は常に自由の筈であり、ほかに何をしようと、恋人をつくろうと、私は目をつぶっていなければならぬ筈です。私はヤキモチはキライです。自分にとつても、これは不快な感情ですよ。そのくせ、やつぱり、やくんです。これは本能というヤツで、まったく、なさない次第です」

ヤス子の表情もその正座も微動もしない。私だつて、切りだした以上は、オメズ、オクセズ、めつたなことで、あとへは引かない。

「私も然し、たいがいのヤキモチはジツとこらえていられるのです。又、こらえていなければいけない筈のものなんですよ。けれども、大浦先生の場合だけは特別ですよ。先生と私との関係は、今までたゞもう私が犬馬の勞をつくすに拘らず、踏みつけられ、利用され、傷けられるのみの関係ですから、ヤキモチ、いや、これはもう、男の意地というものなんです。特に、ヤス子さん、あなたの場合だけは、負けられない。大浦博士が旅行参加を申しで、このかた、私は殆ど、寝もやらず、遂に悲愴なる決意をかためた次第なんです。私はあなたを尊敬し、敬愛し、祈りたいほど愛し、あこがれていました。けれども、大浦先生に出鼻をくじかれて、あの先生と私との関係が今までもそういう関係なものですから、その情性によつて、たゞもう、ひそかに、ネチネチと思ひ屈し、恋いこがれるのみ、悲し

い思いをしていたのです。こうして、今、うちあけることができ、私は清々しているのです。左様なわけですから、どうか、お願いです。旅行は不参ということにして下さいませんか。さもなければ、私は胸の切なさに、死ななければなりません」

ヤス子は黙然と無表情であったが、やがて始めて意志的に笑おうとつとめて、

「私、そんなお言葉を承るには馴れていないものですから、今すぐ私の本心からの御返事ができるかどうか、心もとなない気持なのです。そうまで仰有います以上は、旅行に不参と致さなければいけないように思われますから、不参することに致しましょう。お言葉に逆らうことが致しにくいように思われるための御返事なのです。私の本心がそう致したいということとは無関係なことなのです」

ひどく冷静なものである。私もいくらか戸惑いした。次の言葉に窮したという気持であったが、そんなことではいけないと、ムリに機械に油をさすようにして、

「ありがたいシアワセです。おかげで私も安心しましたが、然し、ムリヤリあなたの気持ちをネジ向けていたゞいた心苦しきには、当惑、むしろ、罪悪、やりきれません。私はまったく御婦人に思いをかけるということは、下僕として仕え、尊敬するというタテマエですから、何かこう、社長めいてお話するのが変テコで、まして、その関係を利用してよろ

うなのが、やりきれないのです。社長なんかと思わずに、きいて下さい。私はあなたを尊敬し、おしたいしている下僕です。もとより私は、一介のヤミ屋、教養とても低い男です。無数に恋もしてきました。私は然しいつも恋に仕え、愛人に仕えることを喜びとしたものです。私は結婚しようの何のと、そんなウソはついたことがありません。私はいつも下僕と遊んで下さい、たゞ遊んで下さいと頼むのです。どうせ私のような者には、はじめから御氣に召して下さいる御婦人はありませんから、私はいつも、必死にたゞもう頼むのですよ。その代り、お気に召すよう、どのような努力も致します。仰せにしたがい、どのようなにもして実を見せます。水火をいといません。どの愛人にも、そうでした。然し、ヤス子さん、地位も学もない私如き者のことです。私のかかりあつた御婦人も御同様、学も理想も気品もない方々ばかりで、これはひとえに敗戦によるタマモノでしょう、あなたのような高貴な、また識見高い御婦人に近づき得るなど、は、夢のような思いなのです。あなたから見れば、下賤、下素<sup>げすげろう</sup>下郎、卑しむべきウヅムシに見えるでしょうが、恋に奉仕する私の下僕の心構えというものは、これはともかく、私がとるにも足らぬものながらこの一生を賭けているカケガエのない魂で、これだけが私の生存の意味でもあり、誇りでもあり、私の全部でもあるのです。私があなたにマゴゴロこめて奉仕することを許していたゞきた

いものです。如何なる仰せにも従います。犬馬の勞をつくします。私はあなたの心もからだも、下僕のマゴゴロの尊敬をこめて愛し仕えますから、どうか私と遊んで下さい。この願いをきゝいれて下さい」

ヤス子の顔色は相変らず犯しがたいものがあつたが、むしろいくらか、やわらかな翳がさして、

「私は肉体にこだわるものではありません。終戦後、様々な幻滅から、私の考えも変わりましたが、然し、理想をすてたわけではありません。肉体の純潔などゝいうことよりも、もっと大切な何かゝある。そういう意味で、私はもはや肉体の純潔などに縛られようとは思わなくなっているのです。然し、肉体を軽々しく扱うつもりはありません、肉慾的な快樂のみで恋をする気もありません。社長はよく仰有いますね。恋は一時のもの、一時的な病的心理にすぎないのだから、と。それは私も同感致しておりますのです。然し、恋の病的状態のすぎ去つたあと、肉体だけが残るわけではありますまい。私は恋を思うとき、上高地でみた大正池と穂高の景色を思いだすのでございます。自然があのように静かで爽やかであるように、人の心も静かで爽やかで有り得ない筈はない、人の心に住む恋心とても、あのように澄んだもので有り得ないことはなかりうと、女心の感傷かも知れませぬ、けれ

ども、私の願いなのです。夢なのです。私は現実にも夢をもとめてはおりませぬけれども、その夢に似せて行きたいとは思いますが。私は肉体や、その遊びを軽蔑いたしてはおりませぬ。肉体を弄ぶことも、捨てることも怖れてはおりませぬ。たゞその代償をもとめています。その代りに、ほかに高まる何かゞ欲しいと思えます。女の心は、殿方の心によつて高まる以外に仕方がないとも思います。私の心を高めて下さる殿方ならば、私はどなたに身をおまかせ致しても悔いませぬ」

「そうですか。すると、お言葉の意味は、私はつまり、あなたの心を高める男ではないというわけですね」

「いゝえ、今までの浅いおつきあいでは、わかりかねるといっただけの意味です」

ヤス子は一きわ顔をひきしめ、私をきびしく見つめて、言った。それは私を励ますような様子でもあった。母性愛の一変形というような、いわば不良児へのいたわりと激励というところであろう。そこで私がウマを合わせて、

「じゃア、見込みがないわけでもないのだな。そう考えて、よろしいのですね」

ヤス子は答えない。なんとなく、侘びしそうな浮かない様子であった。冗談が嫌いなのだろう。

「ヤス子さん。あなたを高めるといったって、事実、私は全部のものを今こゝへさらけ出してきているですよ。手練手管のある人間でもなく、頭のヒキダシの中に学問をつめこんでおく男でもありません。まったく、これだけの人間です。先程も申しました通り、つまり、恋と愛人とに奉仕する、すべてを賭けて奉仕のマゴコロを致すというだけの人間なんです。それが私の身上です。イノチなのです。それが人を、高めるのか、低めるのか、それは私は知りません。たゞ、人を傷つけないことは確かです。そして高めるかどうか、その答が、実際にためしてみた後でなくて、いったい、現れてくるものでしょうか。私は私のすべてのものに賭けて、ひたすら、あなたに奉仕のマゴコロを致したいのです。ためして下さい。そして、それが意にみたぬものであったら、もともと私は下僕です、すて去り、突き放して下さいばよろしいのです。あなたへの奉仕と尊敬は、その切なさにも堪えねばならぬと命じるのですよ」

ヤス子は答えない。

「ためして下さい。私の切なる希<sup>ねが</sup>いをきくとゞけて下さい。さもないと、死にます。いえ、ほんとですとも。この場で、今すぐにも、アツサリと、自殺します。ツラアテではないのです。私は生きてるのが面倒なんですよ。私みたいなバカは、いつまで生きてみた

つて仕方がない。バカながら、自分のバカを感じることは、もう、タクサンという気持ちですな。私は今朝、ふつと、考えたのです。一つのチャンスというものだから、この恋がダメなら、これをキツカケに、いつそ、それで死んじまえと思つたのです。そんな覚悟めいたものは、四五年前から、できていました。然し、実行の気持ちになつたのは、今日がはじめてのことなんです。然し、もとより、死ぬことよりは、切なる思いをきくとゞけていたゞく方が、どれだけ身にしみて有難いか知れません。どうか、私の哀願に許しを与えて下さい」

ヤス子は再び答えなかつた。

私は胸のポケットへ右手を入れた。ある物を握りしめた。私はしばらく、目を閉じていた。私は自然、うなだれてしまった。私の心は寒々と澄んだ。むなしく、ひろく、何もなかつた。こんなものか、と私は思った。なんの感動もなければ、悔いもない。

そして私は、握りしめたものを、胸にきつく押しつけた。心臓からの血しぶきが、胸のワイシャツに赤々とあふれ出た。

私はのめろうとする上体を起して、ヤス子をボンヤリ眺めていた。ヤス子は恐怖と驚愕にすくんだが、今にも私めがけて飛びつこうとするときに、私はガツクリのめってしまつ



た。

「三船さん、バカ、バカ」

私を抱き起そうとしたが、にわかに私の耳に口を当てて、

「シツカリして。今、医者をよびます。そんな、そんな、子供じみたことを」

私は顔をあげた。同時に、からだを起した。私は無言、呆気にとられるヤス子を見つめ、そして、ヤス子の手を静かにとつて、ゆつくりと甲に接吻した。

「ヤス子さん。ごめんなさい。死ぬマネを試してみましたのですよ。でも、ちよつと、死んだよ  
うな気もしましたよ。ゴムフーセンに入れた赤インキですよ」

ヤス子は思いのこもつた鋭い視線で私を睨んでいたが、私は平然たるものである。

「ヤス子さん、事の結果が、あなたをバカにしているようですが、そんな気持ちじゃないのです。私は私のバカさ加減をお目にかけるつもりだったのです。私は軽蔑されようと思つたのです。その意味を御存知ですか。私の一生はピエロなんです。私はそれをハッキリ自覚しているのです。それは世間にはピエロを自認するニヒリストは有り余るほどおりますよ。然し、彼らがピエロでしょうか。ウソですよ。みんな自尊心が強くて、そのアガキの果に、マジナイみたいにピエロ気取りでいるだけですよ。私は、自尊心がないのです。」

ですから、ピエロ、下僕ですよ。私は尊敬し、愛するものに、すべてをあげて奉仕すれば足りるのですよ。私はあなたに軽蔑されてもよろしいのです。それでもマゴゴロをさゝげています。踏んづけられても蹴られても、やつぱりマゴゴロをさゝげて、かりそめにも仕返しなどは致しません。どうせ、それだけのものなんだから、ひとつ、と、私は今朝ふと思ったのです。急に自殺のマネをしてみようと思ったのです。実際、死んでもよかったです。まったく、そうでした。私は胸のインキのタマを握りしめていたとき、死ぬマネをするなどは思わず、実際、短刀を握りしめているのと変りのない気持になつていたので。よし、死のう、と思いました。おかしくもなければ、悲しくもなかったです。まったく、無意味千万でした。でも、ヤス子さん、このバカさ、これは、いつわらぬ私の姿なんです。恋をしても、これだけ、恋に奉仕しても、これだけ、いつも、これで、全部です」

私はヤス子の手をとり、バカみたいに敬うやうや々しく、くちづけした。そして、その手を放さずに、

「まったく、わけが分りやしませんよ。今朝目がさめて、あなたにひとつ、胸のうちを打ちあけてと思うと、たゞなんとなく、ふツと、こんなことをしてみたい気持になつた始末なので。わねながら、バカらしい次第です」

まったく、その通りでもあったのである。然し、私は尋常では、どうせダメだと思ったから、ふと、こんなことをやる気になった。別に確たる計算はない。蛇がでるか、何がでるか知らないが、とにかくキツカケをつくつて、そこから後はその場次第に、出たとこ勝負、当つて碎けるというタテマエの仕事なのである。そして、それには、なまじいに、心理の筋道を考え、計算をととのえてやるよりも、いつぞやタラメなバカゲきつたことをやらかして、偶然に賭ける方がたのしみだと思つただけだ。

この賭けは思ひのほか成功したらしい。なぜなら、ヤス子は私に手を握られて、ボンヤリしているからである。世の中のことは分らぬものだ。後日、ヤス子は私に言ったが、このときは、バカらしくなったのだそうだ。要するに、それだけであつたが、なんだか、感動したということだ。

私は、このバカバカしい成功を、信じていゝか、迷つたほどだ。そして私は信じるよりも、えゝ、どうせバカのついでだ、という居直り強盗の心境になつた。

私はそこで、すり寄つて、ヤス子の肩をやわらかくだいて、静かに接吻した。ヤス子はボンヤリして、うつろな目をあいたまゝ、されるまゝになつていた。

「ヤス子さん。私の魂はあげて下僕、ドレイのマゴゴロです。けれども、とにかく、邪念

なく、マジリケなしに、マゴコロがすべてゞすよ。私はあなたを愛し、尊敬し、こよなく、祈るようにお慕いしています」

とネンゴロに云つて、次第にはげしくだきしめた。



思いをとげるといふことは、ある意味では、むなしいことだ。けれども、私はそうは言わない。マゴコロのもえ育つ日という。私は愛する人が、いとしい。それは、私よりも、いとしくさえ思われる。否、私よりもいとしいとハツキリ言いきれるのである。

わけてもヤス子はいとしかつた。上高地で見た大正池と穂高の澄んだ景色のように、人の心も、その恋も澄む筈だと云つた。あのリンリンたる言葉を、美しい音楽のようにわが耳に思いだして、私の心はいとしさに澄み、そしてひろびろとあたゝまる。

私のようなバカ者の中から何らかの高貴を見出し、高まろうとする。それはヤス子の必死の希いだ。さすれば下僕のマゴコロたるもの、何ものか自ら高貴でありたいと切に祈るのも仕方がない。さりとて、こればかりはムリである。私は所詮高貴じゃない。

梨の花がさいていた。それは私にとっては何かに美なるものには見えなかった。こんなものが、あの食べられる梨になるのかなアと思った。

私はいつもオシャベリだ。人に対して何か喋らずにいることが悪事のようにすら思われる帮間的な性根が具わっているのだが、アイビキのはての帰りの散歩の道などでは、どうい言葉もイヤになって、怒ったように、黙りこんでしまう。私の心がむなしくないからだ。いとしくて、そして、せつないからである。

私は、まったく、金竜のような女と一しよにいる時でも、その悪党ぶり薄情ぶりに敬服し、私よりもはるかに偉いものだと思っていた。ヤス子には、あゝいう水際立った目ざましい特技はないが、そのあたりまえさ、あたりまえの高さ、凜々しさ、それは私の心をやすらかにして、そしてそれだけの何でもないことの中で、金竜のそれとは異質の、然しそれよりも一その目ざましい何かで、とびあがるほど私の心をしめつけることがあった。それは気品というものだろうか。私は自分が、下素なバカ者であることが、あさましくて、せつなかった。

私は自分が甘ったれているのだろうかと思った。自分が下素でバカ者だ、などゝは、甘ったれていることだ。けれども、私はそれで納得できるわけでもないのである。

私はいつそ衣子とのことを、ヤス子に白状しようかと思った。ヤス子に甘えているわけではないのである。そんなことで高まろうというわけでもない。要するに、何かしなないといけないような気がし、圧倒されるからで、それ以外にどういうことでもないのである。

何か奉仕をしなければならぬ。私は夜毎、衣子を訪れるたびに、高価なオクリモノを忘れてなかつた。それも奉仕だ。衣子はそれを喜ぶ女だからである。けれども、ヤス子に対しては、奉仕する物の心当りが無い。はては帰りの道々で、喋る言葉の奉仕すらもできなくなっている始末である。

昼はヤス子に逢い、夜ごとに衣子を訪れた。そして三日の慰安旅行が終つて、大浦博士も戻つてきた。

その夕方、私はシラツパクれて、東京駅へ一行を出迎えにでて、やア、私は商用で、旅行にでられませんで、残念致しましたよ、ヤス子さんにも居残つて手伝いしてもらいましたよ、捜査の方はいかゞでしたか、手がゝりがありましたか、と言つてやった。先生、むくれて、返事もしない。

大浦博士は私を見くびっているから、私と衣子のことなどは考えてみたこともない。その足で、博士はわが家へは帰らず、衣子を訪ねた。情炎の始末をせめてはこゝで、と

いうわけであろうが、ところが、こゝに、さらに、はからざる痛撃をくらった。

意外や、衣子がキリキリとマナジリを決し絶縁を言い渡す。財産横領、結婚サギ、兄弟の共同謀議、面罵をくらったものである。いかなる弁解も、哀願も、うけつける段ではない。

「あなたの腹は底の底まで分りました。いつまでもダマされてはおりません。インフレの生活難とは申せ、名誉ある学者が、市井しせいの無頼漢にも劣らない卑劣なことが、よくもまあおできになったものですね。病院の出張診療もはや御無用に願います」

と云つて、完全に縁がきれてしまった。この病院の大浦博士の出張診療は、この病院の看板であるから、衣子が博士とのクサレ縁をきることができなかつた理由の一つは、その利害にもよるのである。博士はそれを見抜いているから、婆さん慾にからんでいると見くびっていた。腹を立てゝも、この病院の一枚カンバンはおろすわけにはゆくまい、とタカをくゝつている、そこをやられて驚いた。博士の方にしてみても、大学教授ではインフレがのりきれないから、これをやられると、糧道をおびやかされる。

博士はひとまず引きあげたが、あゝは云つても、あの病院の大切なカンバン、折れてこない筈はない、と、電話をかけて、ためしてみても、何日すぎても形勢の変る見込みがな

い。

仕方がないから、私を訪れてきて、

「あの病院、僕がやめたら成立ちやしないだろう。先方も、今さら後悔しても、行きがりの勢い、内々困っているのだから、三船君、君が行って、こだわらなくともよいから、安心させてやりたまえ」

「そうですか。先生の意志はお伝えしてもよろしいけれども、然し、どうも、実は、なんです、衣子さんから私が依頼をうけたこともあるのです」

「なんだい。じゃア、もう、先方から、僕に復帰してくれるように、君にたのんできたのかい」

「とんでもない。実はA大の久保博士ですな。あの方は天下に先生と並び立つ隠れもないその道の大家、名医ですが、あの方に後任をたのんでくれとのことで、四五日まえ、ハツキリ話がきまって、今日あたりはもう出張診療されている筈なんですな。この先生を口説き落すには、私もずいぶん骨を折りましたよ」

愕然、大浦博士は顔色を失い、私の言葉を、鉛色の目の玉でみつめている。

「君は、その依頼をうけて、僕に復帰をたのむ方がいゝというようなことを、言つてやら



なかつたのか」

「それは、もう、如才なく、申上げたものですとも。けれども、衣子さんが受付けやしませんや。物凄い見幕で、私の方が叱りとばされる始末ですもの」

博士の目にランランたる憎しみの光がこもって、

「久保という男は、天下名題の色魔だよ」

まるで私に食つてかゝる見幕である。私も腹にすえかねて、

「そうですか。然し、もう、あの病院には、お嬢さんは例の通り、どこかの色魔にそゝのかされて家出をあそばして、あとはもう、別に色魔にかゝるような御方もいらつしやらないじゃありませんか」

博士は口をひきしめジロリと私に睨みをくれてでゝ行つたが、まもなく、ヤス子はいつてきて、大浦先生が誘うから、三十分ほど外出させてくれ、と云つて、立ち去つた。彼がヤス子を誘いだすのは、殆ど、毎日の例なのである。平素は、ヤス子を誘いにきても、私の部屋に顔をだしはしなかつた。

私の胸は、常に嫉妬に悩んでいた。

私は嫉妬の色をヤス子に見せないために、異常な努力を払っている。すると私の目の色

は、日毎に濁り、無気味な光をたくわえて行くようである。

そして、私は、時々、変なことをするようになった。街を歩いていると、とある家にハシゴがかゝつていて、屋根屋が屋上で仕事をしているのである。ちょうど私が通りかゝった時、屋根屋が屋根の向う側へノソノソ消えて行く時であった。私はフツとハシゴをつかんで、横に地上に倒して見向きもせず歩きだしていた。

又、ある時、買い物して現れて自転車に乗ろうとする男が万年筆を落して知らずに走り去ろうとするから、よびとめて、万年筆を拾いあげて渡してやった。すると、男が胸のポケットへ万年筆を入れようとして、片手に買い物物の包みを持ち、片手でゴソゴソ苦勞している、そのジャンパーのポケットから大きな紙入れが半分ものぞけている、とツさに私はそれをスリ抜いて歩いていった。一万円ちよつと、はいつていた。

私はヤス子に関する限り、大浦博士に勝ち誇る気持には、どうしても、なることができない。私の心は、いつも負け、嫉妬しているだけであった。

私はいつたい何者だろうと考える。私は遊びふけて尽きないだけのお金をかせいでいる。大浦博士はヤス子とお茶をのむ金にも窮しがちであるかも知れない。私は、大浦博士の知らないヤス子の肉体を知っている。

私は然しそのほかに何一つとるに足らない人間にすぎない。大浦博士は、名医であり、教授であり、学者である。立派な風采をもっている。ひろい趣味をもっている。洗練されたマナーをもっている。

どうして、こうも嫉妬深い私であろうか。私はヤキモチはキライなのだ。然し私はいつも嫉妬に狂っている。

私はヤス子を誘う。今夜はダメですと云う。大浦先生と約束があると云う。又、ほかの誰かと約束があると云う。今日は家に用があると云う。一しよに夕食をとつても、それだけで帰ってしまう。

ヤス子はハッキリと私を見つめて返事をする。それは嘘はつきません、ということではなくて、こゝまではホントです、というように私には見える。そして、そこから先は、私は訊くことができない。

「ヤス子さん、あなたは恋愛したいと思いませんか？」

「えゝ」

と、ハッキリ答えるのである。

「どんな人？」

「一番偉い、立派な方」

「有名な人が好きですか」

「有名な方は、ともかく才能ある方でしょう。女は有名が好きですわ。すべての方に好かれる人を、自分のものにしたがるのですわ」

「なんだか、あてつけられているようだな」

「こういう時には、ヤス子はいつも返事をしない。」

「私の心は、浮気です。そして、私の浮気の心を縛りつけてくれる鎖となるような、大きな力が知りたいのです。欲しいのです」

ヤス子の目に浮気の光は見る事ができない。然し、誰よりも浮気であるかも知れないことを、私もたしかに信じていた。

ヤス子はダンスホールの喧噪の中でも、いつもと変らぬ自若たる様子である。他に無数の踊り狂い恋い狂う人々があることに、目もくれる様子がなかった。それは、そういうことに無頓着なわけではなくて、そういうものゝ最高を見つめ、そのためには、いつ何時でも身をひるがえして飛び去る用意ができているから、という様子でもあった。

「今日は泊りにつれて行って」

と、ヤス子はハッキリと申しでる。その目に色情の翳が宿っていないものだから、私はヤス子の無限の色情、浮気心に圧倒されてしまうのだった。

私はヤス子が妖婦に見えた。これが本当の妖婦だと思ふようになっていた。



失踪の二人は金を費<sup>つか</sup>い果して帰って来た。

美代子はわが家へ帰ることができず、先ず私の会社へヤス子を訪ねてきたが、ヤス子を見ると力が尽きて、倒れてしまった。熱がある。然し、それよりも、腹部の苦痛のために、呻き、もがいた。

生家の病院へかつきこむ。淋毒であった。

二人は温泉などへは行かず、種則の知人の病院の病室へ、入院の形で下宿させてもらっていたのだ。種則は時々外泊した。美代子の持ちだした品物を売って、ダンスーと遊んでいたのである。二人は争うことが多くなつたが、家出の身では、美代子は種則に縫らざるを得ない。種則の外泊のうちに、美代子は種則の知人の医者に犯された。その関係を、種

則は見ないフリをしていた。病院の宿泊代を払わなくても済むからと、彼はむしろ喜んでいたので。種則は、金がつきたので、美代子に命じて、再び家から金目の物を持ち運ばせる手筈であったが、美代子が病気になったので、追いついてしまったのである。

泊っていた病院から、種則のもとへ宿泊料のサイソクが行った。種則は支払うことができなから、美代子に手紙を届けさせて、宿泊料はそっちで支払い、美代子は院長と関係があるのだから、宿泊料の始末は美代子をつける責任がある、という言い分である。食費がはいっているから、この金額は二万七千円になっている。

美代子はまだ病床についていた。家人には手紙を隠していたのだが、病院からサイソクがきて、バレてしまった。

衣子は私をよんで、大浦家へ行って、この始末をつけてくるように、なんなら、こつちから慰藉料請求の訴訟ぐらい起してもいいのだから、というキツイ御命令である。

そこで私は大浦家を訪れて、

「あなた方御兄弟もミミツチイ悪党じゃありませんか。こんな宿泊料を小娘に押しつけようなんて、ケチもいゝけれど、あんまりミミツチイ話じゃありませんか。第一、ヤブヘビですよ。慰藉料請求というような訴訟を起されたら、どうなさる」

種則は平然と苦笑して、

「君は、いつたい、ユスリ屋かい。どこに僕の支払いの責任があるんだ。美代子は僕に隠れて院長とできているのだ。僕は裏切られているのだぜ。慰藉料を請求するんだったら、院長のところへ行くがいゝさ。それで宿泊料を帳消しにするのがよからうよ。とつと、帰りましたまえ。変なユスリ方をするよ、タメにならないよ」

と云つて、ヨタ者みたいなセセラ笑いをしている。私は全く腹を立てた。

「よろしい。只今の言葉をお忘れなさるな」

私はその足で、二人の泊つた病院へ行き院長に会い、

「さて、先生、私は富田病院から来た者ですが、大浦種則なる先生が、この病院の宿泊料二万七千円、これを美代子に支払いの義務があると云つてきました。その理由は、あなたと美代子に関係があるから、と、こういう次第です。関係のことはともかくとして、美代子の方に支払いの責任ありとは思われませんか、当方の意志をこちらへお伝えに参りました。宿泊料の請求は大浦種則に願ひします」

院長は顔色ひとつ変えず、苦々しげに皺をよせて、

「なに、関係？　なにを云つとる。パンパンみたいなものじゃないか。こつちは淋病をも

らつて、被害を蒙っているだけだ。こっちは、とにかく、誰からでもいゝさ。宿泊料だけ、もらえばいゝのさ」

私はカンカン立腹して、立ち戻つて、報告して、

「あんな悪党でもつたら、ありやしません。黙っている手はありません。これは、もう、ハッキリ訴訟を起して、慰藉料をとるべきです」

すると、衣子の顔色が変わつた。

「なんですつて、三船さん。あなたは美代子の恥を表向きにさせたいのですか」

「そんなバカな。然し、あなた、これだけナメられて、それでいゝのですか。種則はユスリだと云い、院長は美代子なんてパンパンじゃないか、というゴセンタクですよ。慰藉料だつて請求できるんだとは、これは先刻、あなたの口からでた御意見ではありませんか」

衣子はジロリと私を見た。

「慰藉料だつて請求できる立場にあると申しましたが、慰藉料を請求すると私がいつ申しましたか。三船さん。あなたはワガママですよ。それに、なさることが卑劣ですよ。あなたのカケアイはなんですか。先方にユスリだのパンパンなどゝ言いくるめられて、ひき下つてきて、それはあなたの責任ではありませんか。御自分が勝つべきカケアイに言いくる



められて、そのハライセに、美代子の恥をさらさせてまで仇をとって、と、それはあなたが、ワガママ、卑劣ではありませんか」

「卑劣とは、何事ですか」

私は立腹のあまり、思わず叫んだ。

衣子は然し、冷然として、最もつめたたくジロリと一ベツをくれた。そこには、怒りと憎しみが燃えたつていた。

「三船さん。卑劣とは、あなたという人、そっくり、そのことですよ。当然理のある力ケアイに、ユスリなど、言いがりをつけられるのも、あなたの人柄のせい、あなたの性根のせい、あなたがユスリのような人で、大方、ユスリでもするように談じこんだのでしよう。恥さらしではありませんか。当家の名誉はどうなるのです。まして、美代子がパンパンなど、そのような無礼なことを、あなたという人が相手であればこそ、あなたが下品、粗野、無教養、礼儀知らず、卑劣であればこそ、言われるのです。美代子のような娘をパンパンなど、辱しめられるのも、あなたのせい、あなたの柄の悪さのために、当家の娘がパンパンなど、」

衣子は血の気を失って、目は宙に吊り、うわずって、言葉をのんだが、私の怒りは、血

が逆流し、コメカミの青筋が激痛をともなつてフクレあがり、目がくらんだ。

「何が当家ですか。当家の娘が、笑わせるよ。まさしく、パンパンじゃないか。大浦種則みたいなウスノロにだまされて、家出をして、金品をまきあげられて、別の男と関係ができて、まさしくパンパンさ。病気になるつて、追んだされなきやア、半年あとには、立派にパンパンになつて、どこかの辻にたゞずんでいたに極つてらア」

「お帰り下さい。出て行きなさい。そして、もう、二度と当家のシキイをまたいではいけません。ヤミ屋、サギ師、イカサマ師のブンザイで、上流家庭へ立入るなど、身の程も知らず、さがりなさい。出て行きなさい」

最後であつた。

その裏に、一つのワケがある筈だ。久保博士の出現である。女のハラワタの汚さよ。男はたとえ人を殺し、人をだまし、盗みをして、このように汚らしく人を裏切り傷けるものではない。女の最後の底なるものゝ醜悪さ。醜悪なるものゝ最も醜悪なるものである。

私は口惜しさ、泣くにも泣かれぬ。

この恨みは、必ず、はらす。私は、誓つた。見事、美代子をパンパンにおとしてみせる。パンパンの如くに、私が美代子を弄んでみせる。

その二日あと、美代子を見舞ったヤス子が、衣子にことづかったからと云って、ハンケチに包んだ私の入れ歯を持つてきた。

衣子の憎しみと嘲弄がそこにこもっているのである。私はヤス子に羞しかった。

「ねえ、ヤス子さん、人の怒りというものは、すさまじいものですよ。私は怒りましたよ。そして、喚きましたよ。然し、ですよ。喚いたと云ったって、歌唄いほどデツカク声をはりあげるわけじゃなし、ちよつとばかり声高になつたというだけで、別に飛び上りもしなけりや、腕をふりまわしもしないのです。それでいて、どうですか。喚くうちに、私は入れ歯を吹きとばしたのです。喚き声のでのと一しよに、とびだして、なくなつたのですよ。嘘のようだが、本当なのですから、不思議ではありませんか。人の怒りというものは、つまり、気魄というようなものに、何か電気の動力みたいな運動力があるんじゃないかな」

ヤス子の顔に、あたゝかい笑いがこもつた。こんなことは、この時までは殆んど、なかつたことであつた。そして、しばらく、何かをあたゝかく抱いているような様子であつたが、

「この入れ歯、病院の奥様が私にお渡しの際は、汚い雑巾につつんでありましたのです。その雑巾で拾いあげたまゝを、お渡しになつたのですわ」

なるほど、たゞは入れ歯を返してよこす筈はない。

ヤス子の笑顔のあたゝかさは、衣子の醜怪な憎しみに対して私へ寄せるいたわりのシルシであろうか。私はヤス子に、こんなにあたゝかく遇せられたことはなかった。怒りも羞らいも、私は忘れることができた。

「すると、あなたが、ハンケチに包んで下さったのですね。なんて、幸福なんだろう」

私はハンケチを押しいたゞいた。すると、胸がつまり、にわかには涙があふれでゝくるのである。私は押しいたゞいたまゝハンケチを目に押し当てゝごまかしたが、涙はいつまでもとまらず、顔を膝に当てゝ起すことができなかった。



私が美代子を誘拐したのは、それから二ヶ月ほど後のことであった。

私はヤス子の名を用いて美代子をよびだし、会員組織のホールへ案内して、今にヤス子がくる筈だからと、飲んで踊って酔わせておいて、じゃア、こゝのあとで、御飯をたべる約束だから、そっちで待っているのだらうと、さらに飲み屋へ案内して泥酔させ、前後不

覺の美代子を待合へつれこんで、衣子と寝たその部屋で、私はかねての思いをとげた。

私という奴がどんなバカだか、すでに皆さん御承知の筈だ。

私は結果の怖しさを知りながら、本能的な何かに惹かれて、すでに事をやり終っているのである。

私はヤス子に恋いこがれ、あこがれ、祈り、狂っているのである。そのヤス子の名をかたり、ヤス子の慈しむ少女をさらって暴行する、ヤス子は怒り、蔑み、私を捨て、去るであらう。

私はヤス子に捨てられる日の不安のために、日夜を問わず悩み狂っているのである。その不安と怖れにくらべれば、美代子などは何物でもない。魅力もさしたるものではなく、衣子への復讐の誓いと云つても、それも、今は、すでにさしたるものではなかった。

そのくせ、思いたつ。熱心に計画する。私は緊張し、凶太くなり、そして、私の目の鉛色に光りだすのが自分にも分るように思われる。メンミツに、ジンソクに、着々と、私はすでに実行しているのであった。

オロカである。オロカ。オロカ。ああ！ オロカ。オロカモノよ。

すでに、すべては、破滅したと思つた。

どうして再びヤス子の顔を見る勇氣があるう。

私は美代子と、せめて最後の悲しい旅にしようと思った。

美代子は、まるで、白痴であった。怒り、呪い、蔑んでも、私に従わざるを得ないのである。再三の罪の怖れのために、わが家へ戻る力がつきているのである。

私の胸には、もはや怒りも復讐もなかったけれども、私を憎み蔑みながら私に従わざるを得ぬ美代子を見ると、衣子を思い、あの女の最後の底なる醜悪なるものを思つて、目を閉じ、耳をふさぎ、嘔吐を覚えるのであった。

私は然し、美代子をオロソカにはしなかつた。どのように私を憎み蔑んでも、私はいたり、貴重な品物のように、大切に扱つてやる。私にとっては、やっぱり、いとしく、いじらしい品物なのである。

「さア、おいで、髪の毛がみだれているよ」

美代子はうづくまり、突きさすように私を睨んでいる。

「よし、よし、それでは」

私が立つて美代子のそばへ寄りそい、髪の毛をくしけずつてやる。美代子はジツと、私  
が今立ち去つた空白を、さつきと同じあのまゝの視線で睨みつけて動かない。然し、私の

されるがまゝになっている。

私たちは雪国へ行つた。例年はまだ雪に早い季節であつたが、この年は特別で、もはや数尺、根雪となつていたのである。

死んでもいゝとは思つていたが、特に死ぬ気も持たなかつた。私はヤス子を怖れていたが、罪を怖れてはいなかつた。

誘拐の罪で捕われて裁かれる、それぐらいに、たじろぐ気持はなかつたのだ。私はニヒリストでもロマンチストでもない。私のような人間は、金さえあれば、と思つている。金銭万能、金さえあれば、なんでもある、イノチもある。牢獄から出たときに、私の仕事のツナガリがまだ残つていて、なんとか金のはいる道があれば、それでよい。然し、会社がうまくそれまで存続するか、もしもツブレてしまつていれば、私はそれを思うと、やつぱり、いくらか、ゾツとする。いさゝか恐怖に目をとじる。そのときは、死ななければならぬというような気がするからだ。金がなければ、イノチもないのである。まあ、然し、そのときはその時だ、と、思いついて、私は安心して目をあけるのである。

私はヤス子が入れ歯を包んできてくれたハンケチを貰つて、大事に胸のポケットにしまつていた。時々それを取りだして、せつない思慕にふけつた。

別に魅力のある肉体でもない。どこと行って、特に考えると、つかまえどころのない平凡なヤス子であった。何が、いったい、私の心をつかみ、これほど思いの全てを切なくさせてしまうのだから、もう私には考える力もないのであった。

私の思慕の切なさは、たまらなくなつた。思いきつて、ヤス子に逢いたい決意をかためた。ヤス子の怒りと憎しみを見ることがどれほど苦しいものであつても、ヤス子を一目も見られぬ怖れの苦しさが切なくなつていたからだ。

私たちは東京へもどり、私はヤス子に電話をかけた。

私はヤス子が現れたとき、顔をあげることができなかった。

美代子がヤス子にすがつて泣いている。私はそれも見なかった。私はついに、最初の視線がチラリと合つて顔をそむけてのちは、どうしても顔があげられず、その方からだを向けていることすらもできなかった。

私は顔を伏せてそむけたまゝヤス子に近づいて、胸のポケットのハンカチをとりだして突きだして、

「美代子さんと、このハンケチとを、あなたに返えすよ。おわびする。どんな憎しみも軽蔑も、容赦なく、私はみんな受けます。そして、どうか、行って下さい」



ヤス子が私に近づき、私の正面に廻った。私はそれにつれて、からだを横にずり向けた。ヤス子はそれを追い、正面へ正面へと廻ろうとしていたが、あきらめて、止った。

「美代子さんをお返しして、すぐ、また、来ます。こゝに待っていて下さい」

ヤス子と美代子は立去った。遠からぬ時間のうちにヤス子は一人戻ってきた。

ヤス子は又私の正面へ廻った。横へずれる私の肩を両手でシツカと抑えとめて、

「三船さん。顔をあげて、私を見て下さい。私は怒っていません。憎んでいません。蔑んでいません。ほら、私の目を見て下さい」

私はやつぱり顔をあげられなかった。

ヤス子の手が肩を放れて、私の額にやわらかくふれた。その手が、私の顔をあげさせた。ヤス子が私をのぞきこんで、エンゼンとほゝえんでいるではないか。然し私がどうしてそれを喜ぶことができようか。何事を私が言い得ようか。私はすくみ、放心した。悲しさすらもなかった。苦痛の果のむなしさが全てゞあつた。

「三船さん。私は今こそあなたを愛することができると信じられるようになったのです。以前はそうではなかったのです。軽蔑も、どこかに感じておりました。汚なさも、どこかに感じておりました。今はそうではありません。尊敬の思いすらもいだいております。私は

あなたから、人の子の罪の切なさを知りました。罪のもつ清純なものを教わりました。あなたはたゞ弱い方です。然し、あなたは清らかな方です。いつか、あなたに申したでしょう。上高地で見た大正池と穂高の澄んだ姿のように、人の姿も自然のように澄まない筈は有り得ないのだ、と。三船さん。私は今では、私自身の中ではなしに、あなたのお姿の中に、上高地の澄んだ自然を感じる事ができるようになりましたのです。私は、この私の感じの正しさを信じております。私はいつまでもお待ちしております。今すぐに自首して下さい。そして、お帰りの日を」

ヤス子のエンゼンたるほゝえみに、大らかな、花のような光がさした。ヤス子の唇があたり、かく私にせまり、ヤス子の腕が私のウナジを静かに然し強くまいた。

それから一時間半ほどの後である。私は警察へたどりついた。玄関前で、ヤス子に別れた。私は結局、あれからも、ヤス子に一言も語らなかつた。語る何ものもなかつたのだ。別れの挨拶の言葉すらも、なかつたのである。私はふりむきもしなかつた。

ほどへて私は刑事部屋で、一人の刑事にこう頼んでいた。

「ねむらせて下さい。一時間でいいのです。あゝ、疲れた。ウワゴトを言ったら、覚えておいて下さい。あゝ、何か、オレの喋ることが、分ればいゝ」

そして、ゴロンところがっている、はじめて、うすい涙があふれてきた。



# 青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 06」筑摩書房

1998（平成10）年7月20日初版第1刷発行

底本の親本：前半「文藝春秋 第二六巻第四号」

1948（昭和23）年4月1日発行

後半「別冊文藝春秋 第六輯」

1948（昭和23）年4月1日発行

初出：前半「文藝春秋 第二六巻第四号」

1948（昭和23）年4月1日発行

後半「別冊文藝春秋 第六輯」

1948（昭和23）年4月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2007年4月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ジロリの女

——ゴロー三船とマゴコロの手記——

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 坂口安吾

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>